
GUNZ OF PATRIOT

もみすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G U N Z O F P A T R I O T

【Nコード】

N 3 0 9 0 B A

【作者名】

もみすけ

【あらすじ】

V R M M O 「 G U N Z O F P A T R I O T 」 で遊んでいた主人公シユウが何の因果か、ゲーム中の能力を受け継いだまま異世界へ召喚され、何だかんだありながら建国します。
ご都合主義の主人公最強物語です。

作者は、今回初投稿および、文才はありません。矛盾点は多々あると思いますが、生暖かくスルーをお願いします。

第1話（前書き）

このたびは、読んで頂ありがとうございます。

初投稿&gdgd内容、そんな武器ねえよ！と思われるかもしれませんが、そこはご容赦をm（――）m

第1話

夜の荒野に風が吹き、砂ほこりが舞い上がる。

小高い丘の上に擬態した1つの人型が片膝を付き左右の肩の上から砲塔と左右の手にそれぞれ持つ狙撃ライフルが同じ方向に伸びている。

近くで見れば、その人型の大きさと重武装の容姿に驚く事だろう。片膝をついた状態でも高さが5m以上、立ちあがれば10mを超える巨体を誇る魔導機兵と言われる存在だった。

頭部は大きさの違う四角形を二つ合わせ正面に紅い単眼を持つオリジナル魔導機兵「ヴァンゼ05L」だ。

巨大な体躯は重装甲に覆われ、鋭角なフォルムを持つ。その巨体を支える様に巨木を思わせる太い脚部の足裏にはキャタピラを持ち、背中に4基、腰に2基の大型バーニアを持つ事で巨体の移動を助けていた。

遙か彼方へ照準を合わせている各武装も巨体に見合った大きさを誇り、肩の両端に装備した大型シールドや背中に2門ある80mm砲は、砲身を二つに折りたたんで装着され、鉄鋼弾と榴弾の二種類の弾種が選択できる。今は砲塔を伸ばし榴弾が装填されている。腕に装備した楯の内側には2連装の30mmマシンガンが内蔵されているが今は楯の内側に収まって待機状態だ。

どの武装も人間では間違えても仕様できない大きさがある。

この魔導機兵を見た8割は顔を顰め1割が馬鹿だと思い、最後の1割で恐れるだろう。

魔導機兵を操縦する為には大量の魔力を消費し重量が上がれば比例して消費魔力も上がるからだ。

魔導機兵は自分が持つ魔力を使うか、大気中に存在する魔素を吸気口から機体に取り込み、魔道エンジンに送る事で魔力をという動力を二種類の方法がある。

しかし、ここで問題が入力と出力は同じでは無いという事だった。魔導機兵を操縦すれば魔力を消費し、機体が吸収する以上のペースならば魔力が枯渇して敵に殺されるだけになる。これを回避する為に、背中か腰に魔力槽というタンクを取り付け稼働時間を延ばすのが常識だった。しかし、この機体には魔力槽を取り付ける箇所に大型ブースターを取り付けている。魔力槽で延命措置を取らず、代わりにバーニアを積んで稼働時間を縮めているのだ。馬鹿と思われるも仕方がない。

そして何より、ここまで重武装する火薬庫みたいな魔導機兵は滅多にいない。

魔道機兵の中にいるシュウは肌にフィットした黒いパイロットスーツを着て同色のヘルメットを被ってコックピットの中に息を殺しながらスコープに映る映像を見ていた。

今シュウが見ている先では軽量偵察部隊が先行して情報を集積しており報告を待っている状態だった。

そして、ヘルメットに内蔵されている無線機から連絡がはいる。戦闘中なのだろう、乱れた音声の後ろから重い銃声が一定のリズムで聞こえてくる。

『偵察班から報告。前方、5000北北東で中級索敵1、重スナイパー1、重突撃4と戦闘中。別部隊も重突撃3機と交戦中です。我々は退却し合流地点へ向かいます。合流予定は10分』

「了解。有効射程に入り次第攻撃を開始します」

『わかりました。そっちに逃g:』

仲間の言葉の途中に無線が切れ前方に小さな爆発光を確認した。他の仲間からの無線も無い事に先行部隊は全滅したと仮定してシュウは迎撃準備を始めた。

無線が切れてから2分後、スコープが捉えた映像から敵の中に最高

広範囲レーダーの機能を持つ円盤タイプの頭部を持つ索敵タイプが見えた。もう少し近づけばシュウが待機している地点を割り出すだろう。

だが、シュウは動かずに照準を向ける。レーダーの範囲よりシュウの射程の方が広範囲だとわかってるからだ。

今のシュウが操縦する機体は遠距離攻撃に調整している。既に射程範囲に入った敵をロックする円形の表示は緑から赤に変わって攻撃可能だと示していた。

本来なら多数の相手をせずに逃げるべき場面だ。

だが、この場面で何もしないで退くという選択肢はシュウには存在しない。

「装甲が薄い索敵を前に出すな！」

狙撃ライフルがコックピットを狙える距離に近づいた瞬間、一つ呟きと共に操縦桿のトリガーを引く。

二挺の狙撃ライフルは命令を着実に実行し火を噴くとドウツという音を2回発し60mmの鋼鉄の弾丸を遙か前方にいる索敵機のまず、頭を潰し続いてコックピットに叩き込んだ。

シュウは味方からの報告でもモニターからも遠距離攻撃型の存在を確認したが、不意打ちした位置はまだばれないはずだ。マズルフラッシュは見られた可能性はあるが、まだ距離があり、たとえコックピットを外したとしても頭部にあるレーダーを潰せばシュウの詳しい位置を割り出すのに時間がかかる。その為、頭部を先に狙い一瞬遅れてコックピットを狙った。

コックピットを貫かれた敵は後方にいるマシンガンを装備した重突撃機へ倒れ、足を止めさせる。

それがシュウの狙いだった。すぐに背面武装の80mm砲を調整し、すぐさま発射。

前方から発射された榴弾に気が付いた重突撃機は咄嗟に偵察機を盾

にして爆発からの被害を抑えようとしたが直撃を喰らった偵察機は爆散し、最終的に両腕を失って重突撃機も戦闘不能状態に追い詰められる。

初撃で2機も無力化出来たと喜びたいが、まだシュウは油断できない。バズーカとマシンガンを持つ重突撃機3機とスナイパーが無傷で残ったからだ。

二度目の攻撃から位置を割り出した残る4機が仲間を殺された怒りに震えバーニアとキャタピラを使って回避運動を取りながら突出してくる。

まだ敵の重突撃機の射程内に入っていないシュウは機体を立ち上がらせると狙撃ライフルをスナイパーに向け撃ち込んで重突撃機には榴弾を撃って牽制する。

敵はシュウがいる丘を迂回するはずなので5分は時間が稼げるはずだ。そしてその5分を有効に使えば敵を倒しきることは出来る。

（全力で逃げたとしても直ぐに追いつかれ背中から撃たれるとわかりきってるしね…）

シュウを狙撃しようとしたスナイパーの動きが止まった瞬間をシュウは見逃さなかった。ライフル弾を撃ちこみ牽制した処でライフルの弾が切れた。リロードする間にスナイパーが逃げるのが分かっていたので、シュウは榴弾を撃ちこみスナイパーの止めを刺す。

しかし、牽制が無くなった重突撃機が距離を稼いで射程に入ってしまった機体のすぐ横を赤く燃えた弾頭が通り過ぎて地面を広範囲に爆発させる事態に見舞われた。

爆風の範囲に曝され機体へダメージを与えるが、重装甲の機体に損傷は殆どない。だが、予想より敵が速い事にシュウの顔は苦くなる。

（くそっ！無駄な武装を捨てて速度稼ぎがかった）

バズーカの射程はマシンガンより長い代わりに命中率が低い。しかし、爆発という範囲攻撃の為、命中させなくても被害が出る。敵の3機に更に近づかれ連続で撃ちこまれば重装甲でも耐えられないだろう。そこで突撃機達は考えた、余計な武装を捨てて速度を得よう。全速力で移動している時は背面武装の命中率も下がる。それなら邪魔だと取り外し武装をバズーカのみにした3機を選択は正しいし、シュウを苦しめるのに成功している。

シュウは狭い丘の上を器用に動き盾を構えて少しでも被害を抑え、敵の侵攻を少しでも遅くさせようと足掻くが敵の攻撃が激しく反撃回数が減り相手の侵攻を阻むことはできない。

この遣り取りを横から見ている者がいればシュウの撃破は時間の問題と思っただろう。しかし、ただで終わるつもりはシュウには無かった。

「やっтарうじゃねえか！こうなったら我慢比べだ」

向かってくる敵に弾幕を張るが距離が短くなりバズーカの爆炎が更に近くに届くようになったシュウは盾に収納された二連装30mmマシンガンの有効射程に入る前に展開し反撃回数を更に抑える。

そして罫とも知らず反撃回数が減っていた故、恐れずに不用意に直進してきた敵重突撃機2機を確認したシュウはバズーカの弾頭を避けた次の瞬間

「なめるなああああ！」

シュウは不用意に來た獲物へ毎分300発を放つマシンガンと大口徑狙撃ライフルを向ける。いきなり凶器を向けられた重突撃機は急いで逃れようとするが動きが遅い。油断していたが故、強者の驕りと言えはいいのだろう。いきなりの反撃に数瞬の反応が遅れたのだ。そして、その数瞬はシュウがトリガーを引くのに十分な時間だった。

楯から延びる二連装マシンガンが交互に火を噴き、叩きつけられた鋼鉄の弾丸を受けた衝撃で相手に奇妙な踊りを強要し、持っていたバズーカを弾き飛ばす。そしてライフルの弾丸が敵の機体を貫通して特大の穴を量産して致命傷を与えた。

ライフルとマシンガンの雨の様な弾幕を自分から飛び込むように浴び、自身の体を穴だらけにして鉄屑に変えられた獲物は白煙を上げ、重量物が倒れた為に土煙りが発生し周囲を隠す。

偶然か必然か、その舞い上がった土煙りがシュウの運命を最終的に潰した。

視界が利かなくなった事に危機感を抱いたシュウは急いで後進した。しかし、それを待っていたとばかりにヴァンゼの右足を衝撃が襲った。

視界を遮られた為に、残った重突撃機の攻撃を察知できず直撃を喰らった為だ。

咄嗟の事態にシュウは対応できずバランスを崩し、同じ場所に2回目の衝撃を右足に受ける。結果、右腕から転倒する事になってしまい地面を削り飛ばしながら滑る事になる。滑ってから止まるまでの間に右腕はライフルを握ったまま折れて飛んでいき、背面武装の80mm砲は損傷が酷く砲塔は曲がって使えなくなる。この時点でシュウの持つ80%の武装が無力化される事になった。だが、シュウは飛んで行く自分の機体のパーツや次々モニターを埋めていく警告を視界の片隅に見ながら敵からは視線を外さない。

残った左に持つ狙撃ライフルのスコープから送られる映像に煙を上げる砲口が向けられていたからだ。

重突撃機を2機同時に倒した際、シュウは命中率を上げるためスピードを落としていた。そして、目の前にいる機体はシュウが攻撃して視線が集中している間に丘を回り込んだのだらう。

シュウは無駄と半ば悟っていたが、最後の悪あがきと思い唯一残った使用可能武装、左手に残った2連装マシンガンの残弾を全て撃ち

つくせと引き金を引く。

しかし、損傷した左腕はブレが酷く命中精度は低くなって殆ど命中しない。

「当たれやあああああ！」

最後の希望に縋りつく様に叫びトリガーを引く。ドドドッと重い連続音が響くが直ぐに消えていく。そして、二つドンツと自分の撃つマシンガンとは違う音がしてシュウを衝撃が襲った。

「クツ…」

シュウの機体に残された左腕が武装と共に爆散した衝撃だった。両腕と片足を失い、もはや移動も攻撃手段も残されていない。もうなにも出来ないシュウが敵に嬲り殺されるのは自明の理だった。

「くっそー…。やっぱり6機目は無理だったー！」

モニターに向けて愚痴を零していると敵重突撃機が大口径のバズーカをシュウのいるコックピットへ向ける。

激戦区で5機も単機で倒せば十分強い部類に入るがシュウはまだあきらめない。

「まあ、いつか。6機も倒せば上等だろ」

その呟きは今シュウにトドメを刺そうとしている敵の撃破を諦めていない。

座席の下にあるレバーを勢いよく引き、モニターに浮かんだ赤く点滅するボタンを殴る様に押した。

そのレバーには一言「自爆安全レバー」、そして赤く点滅していた

ボタンは「自爆許可」という文字。

ボタンを押した次の瞬間、シュウのいるコックピットは爆炎と光に包まれ、敵の重突撃機と共に消滅する。

シュウは一人で敵侵攻パーティ6人を全滅させた。

「ここはどこなんだよ…」

修治の眼の前には草原しか無く、周囲に人工物は一切見られない。移動した記憶も記憶喪失になったというわけでもないが、気がついたら目の前には知らない光景がある。

さっきまで遊んでいたVRMMORPG「GUNZ OF PTR IOT」の世界とは違っていた。

あの世界では資源惑星が舞台であり、その星では機族と言われる機械生命体対人類、そして人類同士で戦争をしている設定だった。剣や魔法等のファンタジー要素と銃やロボット等のSFが存在し好きなプレイスタイルを選べる魅力があったが、惑星は荒廃しており廃墟や砂漠、岩石地帯等の乾燥した風景が殆どであり、ここまで緑豊かなステージは無いはずだ。

何より通常フィールドで倒されたプレイヤーはホームポイントに設定した街で復活するはずなのだが、どう考えても修治がホームポイントに設定した街ではない。

先ほど敵側の重突撃機を巻き込んで自爆したシュウはホームポイントに設定している前線基地のある街に戻るはずなのだが、まったく違う場所にいる。

そして、リアリティを追及された昨今のゲームだが、今修治の眼に見映る景色は作り物ではありえない現実感が修治の思考を更に混乱させる。

暫く何も考えられず呆けていると鼻をくすぐる緑と土の香りと体を

優しく撫でるように吹きぬける暖かい風が、混乱している修治を正気に戻そうとし、可能性は低いが有り得る事柄から答えを導きだそうとする。

「回線事故でも起きて近くで遊んでいた人と混線したのかなあ……」今の時代、殆ど全てと言って良い程ネットは有線を使わず無線が光通信のどちらかだ、開発初期は混線事故などが起きたが、実装されて40年経つ今の時代に発生する確率は1兆分の1以下だと言われている。

しかし、0%でないなら起きる可能性もある。修治は運が悪かったと思い普段している様に脳裏のメニュー画面を思い浮かべる。

今のゲームはVRで起きた事故を教訓として、メニューを開く等の操作は統一化されている。たとえば、知らないコンテンツだとしても迷う事はない。

修治の脳裏には思った通りメニューの一覧が出て来るが、普段と違っていた。

普段はメニューの左端にあるログアウトが存在していなかった。

見慣れた一覧にはアイテムや魔法等は存在しているが、ステータスやGMコール、チャット設定、そして一番無くてはならないログアウトが無い。

「バグなのかなあ……でも、こんな聞いたこと無いしなあ」

修治は腕を組み顔を顰める。内心落胆しているが悲観はしていない。他に手はあると思っているからだ。

過去に長時間ログインし、現実世界の肉体が昏睡状態へなつてしまい最悪場合、心臓麻痺で死亡したハードゲーマーが数多くいた為、安全装置の取り付けが義務付けられ、一定時間連続で遊ぶと警告が飛ぶ。その警告を無視し続けると回線を問答無用で切断されるのだ。それを不満に思い一部のユーザーは安全装置をクラッキングして無効にしているが全体から見れば1%もいない。そして、ネットゲームのプレイヤーはログインした瞬間から運営の監視を受けている。違反したユーザーは最悪ゲームのアカウントを消されたりするので

巻いた二人の女性を見つめる。

「「やつと目を覚ましたのね」」

修治は西日を手で遮り話しかけてきた二人の顔を確認した。

二人は同じ顔立ち、左右対称の髪型をしており二人の間にはお互いの髪を結び会って一つにまとめている。言われるまでもなく二人が双子だとわかる。違うのは瞳の色位だった。

もちろん修治は会ったこともない人物だ。

「「はじめましてと言うべきかしらね。私たちは双子神の」」

右側の銀色の瞳をした方が口を開き「私が月天宮」、左の金色の瞳の方が「私は陽天宮」と名乗り、それぞれが太陽と月を司っていると語った。

そして二人の声色、抑揚を完璧に会わせた言葉は続く。

「「私たちは、この世界に存在する多くの神々の中に一柱。そして私たちが貴方をこの世界に召喚したの」」

「いや…召喚と言われなくても…」

修治は神と名乗った二人をハッキリ言えば信用しなかった。ゲームをしていて自分の操縦する魔導機兵が敵対プレイヤーに倒されホームポイントへ戻るはずだったのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが。

最初は何かのイベントかとも思えたが、こんなイベントが起きる発表は聞いていない。何かしらのイベントが発生する時は運営側からの報告がメールで届くし突発イベントもあるにはあるが、それも毎回何かしらの手がかりは簡単に手に入る。

修治は訝しげな視線を姉妹神へ向け警戒感を顕にする。そんな修治を見ると二人は対称の口角を吊り上げ楽しそうに笑いながら召喚した理由を語った。

「「ウフフ、そんなに警戒しないでくださいな。この世界では停滞を何よりも忌避しているの。そして世界を動かすには何が一番いいか私たち神々は答えを出したわけ」」

そこまで言われ修治にもやつと理解できた。

つまりこう言う事だ。

「この世界は停滞し始めているから、別の世界にいる俺を召喚したと…」

二人は更に笑い「正解」と言い。お互いの手を取り合ってクルクルと回り始める。そして、この二人の足が地面に着いておらず浮遊している事に初めて修治は気が付いた。

しかし、現実だとしても修治は人選ミスだと思った。修治は平凡なサラリーマンであり特殊技能を持っているわけではない。超能力や魔法を使える訳でも武道をやっていた事もない。

そんな事を考えていると二人の神は、やはり同じ声と抑揚で口を開く。

「この世界に召喚した時の状態、つまり貴方が遊んでいたゲームの能力と一部のアイテムを引き継いでいるわ。ただし、死んだら終わりだけど」

「なるほど…。つまりGUNZ OF PATRIOTのアバターであるシュウが殆どそのまま使えると…」

修治が二人に告げると二人は首肯する。

「貴方がどう生きようが私たち神々は肯定する。この世界に住む人間達を皆殺しにしようが、導こうが私たちは肯定する」

そして二人はクルクル回りながら空に昇って行き段々と姿が希薄になつて消えていく。

消える瞬間に二人が残した言葉はシュウを奈落の底に落としたか、それとも希望になったかは謎のままである。

二人の姉妹神は、こう言った。

「貴方には、不老の力と神と同じ寿命を持つわ。望めば永遠に生き続ける事もできる。だけど、殺されれば死ぬし、貴方もその例に漏れないのを忘れないでね」

「ちよっ…ちよっと待って…」

しかし、修治の懇願は聞き届けられる事は無く幾ら修治が叫ぼうが

姉妹神からの返事はない。

「どうしろってんだよ…何も知らないのに…」

そうして修治はシユウとして生きる事を半ば強制的に強いられ、自分が暮らしてきた世界とは別の世界で生きることになった。

姉妹神と別れた後の修治が行った事は少ない。

体は現実の修治ではなく、ゲームのアバターであるシユウの容姿。黒い髪を持つ典型的な日本人の容姿と180cmの身長。体格はリアルと違つと齟齬が生じると思つた事から現実と殆ど同じにしていたので違和感は殆どない。強いて言えば、30歳には見えない見た目20代前半という所だ。

そして意識内にあるゲーム時代のメニューを開き、アイテムや武装、魔法、スキル等の確認をする。

「アイテムで無事なのは弾薬、魔導機兵、各種武装と魔法にスキルか…。お金は単位が変わつてるけど使えるのかな…」

GUNZ OF PATRIOT時代の通貨単位はYと記載されて^{ユール}いたが、今の単位はGとなつている。何と読むのかは分からないが、9桁もある事から使えれば相当持つていると思つていいだろう。

修治は6年以上やり込んだ為、レベルのカンストと転生を繰り返した事でトップレベルのプレイヤーの一人でもあつた。

でなければ、一人で6機の魔導機兵を相手などできない。

「ヴァンゼの状態はつと…」

魔導機兵の状態を詳しく調べる為、意識を向け内容に苦笑する。

プレイヤーは6機の魔導機兵を所持する事が出来るが、先ほどまで使つていた機体の場所が空欄になつていたからだ。

ゲーム時代では、撃破されると1割で倒した相手に装備の一部が奪われ、2割の確率でアイテム名が鉄屑に変わる。そして、自爆攻撃の場合、6割の確率で自爆した時の装備と機体が全て失われる仕様

があつた。当然自爆する時には覚悟をしていたが、ロストは思ったより痛手だ。

「まあ…覚悟はしてたけどさ…。だけど…機体の予備機はあるからいいけど武装は痛すぎる…」

ヴァンゼ０５Ｌが装備していた武装は全てシュウがゲーム内で設計した予備のないテスト中のオリジナル武装だった。

GUNZ OF PATRIOTでは自分で機体と武装を作れ、まさしくオリジナル専用機が持てた事が多くのプレイヤーを魅了した。そして、優れた武装、優れた機体は高値で取引され武装屋、機体屋等、パーツ屋等と言われる生産職人プレイヤーもいる。

殆どが現実世界の兵器に使えないが、嘘か真か中には実際の兵器に転用可能なアイデアも存在し某国の軍事産業団体がスカウトしたとか噂も出た事もある。

シュウはトッププレイヤーの一人であつたが、彼がゲーム世界で名を知られていた理由は戦闘では無く、シュウが造るオリジナル武装と機体が有名だったからだ。

戦闘に出る場合もあるが、それはあくまでオリジナルの武装と機体のテストであり戦績は気にしていなかった。

中には造ったばかりでテスト前の武装を譲ってくれと言うプレイヤーもいたが、全て断っている。テストもせずに渡すのはゲーム世界のアマチュアだろうがシュウの職人としてのプライドが許さない。

そしてシュウの造った武装や機体をコピーしようとするプレイヤーもいたが、シュウ本人は気にしていない。

それは、シュウの名前がプレイヤー間に流れ始める原因になった小型魔導機兵「SOIT 残影」を造った事による。

重魔導機兵並の高出力を持ち、武装も重魔導機兵と同じ威力を持った武装をさせた。

しかし、これが大不評をもらう事になる。

魔力の消費が半端なく、普通のプレイヤーは持って１０分。戦闘集団の魔力に優れたプレイヤーでも３０分が限界で、何よりも値段が

平均な重突撃兵の5倍した。

そして、高速戦闘になれている小型魔導機兵専門のプレイヤーが眼を廻す程動きが激しくプレイヤーが乗り物酔いを起こしてログアウトするというのが続出したからだ。

しかし、物好きという人はいた。

それでも欲しいと言った中堅プレイヤーに素材価格で残月を譲り2か月後発生したプレイヤー同士で行う所謂戦争に出撃した残影を買ったプレイヤーは、単機で突撃し5分の間に10機の敵重突撃機兵を屠ってトップクラスの仲間入りを果たしている。

それが話題を呼び、シュウの名前が一気に広がる事になる。

しかし、シュウの造り出す機体は万人受けする事は無く、ほんの極一部のプレイヤーが使って極めれば最高の性能を発揮するという物ばかりだった。

そして、それは武装にも言えた。

最高の貫通力を誇る遠距離砲を造った時は、重量から二脚重魔導機兵で動かす事は出来ず、最大積載量誇るが移動速度が最低と言われるタンク型の脚を装備したプレイヤーが固定砲台化して使っている。そして、砲台と化したプレイヤーは偵察機からの報告を受けると近づく敵を片端から一撃で屠っている事に由来して不動要塞と言われる。

その不動要塞が敵国に亡命した時は、激戦区で戦うプレイヤーで戦慄を覚えなかった者はいなかっただろう。

シュウ本人も武装のテスト中に遠距離から撃たれ一撃で吹き飛ばされた事があり、今まで自分が造った物がここまでアホな性能なのかと反省した。

不動要塞と言われるプレイヤーはフレンド登録もしていたので、ホームポイントに戻った後で謝られたが…。

そんな事もあり、ネタとも言える物ばかり造るシュウは本人が自覚せずとも話題に上がった。

そして、ネタで欲しいと思うプレイヤーと、極めようと思うプレイ

ヤーは多くシユウは多くの設計図をコピーし望むプレイヤーに渡していった。劣化したコピーが出回るのが嫌だったし、製造スキルも最高値近くまで必要な為、造れるプレイヤーも知り合いが多かった事に起因する。

「まあ、すぐ見なくなっただし、敵国にまで使われる事になると思わなかったけど…」

最初はシユウが造った機体と武装を使うプレイヤーは多くいた。しかし、余りの使いにくさに数を減らし、今では一部の極めたプレイヤー達がPVPの激戦区で使うのを見るのが殆どだった。

そして使わなくなった多くのプレイヤーが数多くのネタ武器を高額にも拘らず造り出すシユウを無限の馬鹿だと言った事からシユウの造った武装と機体は「インフィニティシリーズ」と言われる事になる。

「まあ、使ってたのはテスト用だし本当に無くして痛いのは別にあるからいいか…」

そしてそんな高額な装備をテスト用と割り切って使い捨てる神経を馬鹿と言うのかもしれないが本人は気にしていなかった。

既に辺りは暗くなり、円に組んだ石の中央で薪がパチパチっと燃えている。

シユウは火の前で地面に座り魚のフライにタルタルソースをかけてパンに挟んでモソモソと食べていた。

GUNZ OF PATRIOTでは魔導機兵が入れないダンジョンもあり白兵戦をする事もある。そして食事によってステータス補正がかかるのでシユウも例外に漏れず大量の食品アイテムもっている。

ゲーム時代では味もステータス補正も調理次第で変わるという事からシユウは色々研究していた。

まさか、それがこんな形で役に立つとは思っていなかったが運が良かったとしか言えないだろう。

ただ、同じアイテム欄に火薬や硫黄なども存在していて変な風に混じって無くてよかったと心から思った。

パンの最後の一欠片を紅茶で流し込んでゲップを一つ。

「さて…。残しておいたスキルと魔法の確認をしますかねえ…」

瓶に入った火薬と各金属のインゴットをアイテムから取り出して並べスキル「弾薬生成」を選んで手を翳す。

そしてゲームと同じ様に呟く。

「弾薬生成9ミリパラベラム」

翳した手の先にある材料が輝きパンつと軽い破裂音と共に9ミリパラベラム弾が小さい木箱に入った状態で60発出来ていた。

「ふむ…弾薬の生成は可能と…。この世界にも材料あれば大丈夫っぽいな」

これで2つシウウの懸念は解消される事になった。

弾薬が無ければ、どんなに強力な銃も役には立たない。ただの鉄の棒と同じだし殴って使うしか手はなくなる。

そしてアイテムの製作には魔力を使うことだった。

自分の魔力を使うと失敗する可能性はあるが通常より強力な改造弾が造れる場合がある。それに比べ大気中にある魔素を使つて製作すると失敗はしないが通常弾しかできない。

今シウウが選んだ方法は後者であり、その結果この世界に魔素がある事を確信したのだ。

ファクトリー

ただし、魔導機兵の装備は工場と言われる設備が必要であり、現状作れる可能性は限りなく低い。

「スキルは大丈夫だな。次は魔法か…」

ここで一つ修治は困る事になる。

シウウの覚えている魔法は全て攻撃用では無いという事だ。

シウウが選んでいる魔法職は「エンチャンタ」であり、付加魔法

と回復魔法しか使えない。

やろうと思えば自分の体を傷つけて回復魔法で治すという手もあるが自傷行為をするつもりはシュウにはない。移動速度を上げる魔法を使えば良いと思うが、既に辺りは暗くなっており木の根などに足を挟まれる可能性もあり使う気にはならない。

「魔法は明日でもいいか。今日は寝よつと…」

今日は、6機の魔導機兵と戦い、自爆してお気に入りの機体を潰し、双子の神に異世界に飛ばされたと思ったならゲームの能力を受け継いでいる。

これで疲れない程シュウの神経は太くない。予備の魔導機兵を呼び出し、片膝を着く待機状態にして乗り込む。

コックピットの座席を倒して横になったシュウは、明日は人里を探そうと考えながら夢の中に落ちて言った。

ガンッガンッと喧しい音が耳を叩きシートが揺れる。

「うおっ！なんだ！なんだ！？」

シュウは操縦桿を握り、魔道機兵をアイドリング状態へ持って行くとモニターに映る姿に呆然とした。

心地よい夢の中にいるシュウを文字通り叩き起こしたのは、3メートル以上ある巨大な猪だったからだ。

口から生える鋭く長い牙と荒い鼻息が興奮状態にあるとシュウに教えている。

ゴフルア！と涎を飛ばし、足で土を蹴り飛ばして一直線に突撃してくる。

シュウは慌てて操縦桿を握り猪の頭を魔導機兵の片腕で受け止める。猪との体格差は3倍以上あり片手でも大丈夫だと思ったが予想通り軽い衝撃を受けたが簡単に受け止める事が可能だった。

「舐めるな！畜生風情がああ！」

昔から低血圧のシュウの寝起きは機嫌が最悪に悪い。

口が悪くなるのは仕方無いとも言えるが、猪が知る由もない。

猪は更に力を込めて足を蹴り立てるが無駄とばかりに魔導機兵の腕が押し返す。

「くたばれやああああ!!」

魔導機兵の手を操作し猪の頭を握って腕を振るう。それだけで猪は巨体を浮かせ5メートル以上離れた所に横倒しで倒れた。

シュウは脚部に収納してある大型オートマチックハンドガンを取り出し右手に握る。

このハンドガンはNPCが売っている中で普通のランクだが、威力と使い勝手の良さから多くのプレイヤーが使っている。

銃口を向け軽く引き金を2回引く。

ドンッドンツと重く乾いた破裂音が2回響き、最初に猪の右前足が吹き飛び、次の音で猪の頭を半分吹き飛ばした。

「どうだこのやろう!」

更にハンドガンの弾を撃ちこみ、猪だった物を肉塊へ変え、弾が切れても引き金を引き続ける。

「眠い…」

猪を肉塊へ変えた後、しばらくして素に戻ったシュウは血の臭いが立ち込めるキャンプした場所を早々に離れた。

血の臭いに他の動物が来る可能性もあるし、何より血の臭いに酔ったからだ。

シュウが走っている所を、この世界の住人が見たら腰を抜かした事だろう。昨夜試さなかった移動速度を上げる魔法と肉体強化の魔法を重ねがけし、人間では出せない速度で走っているからだ。

この世界の移動は馬か徒歩であり、ハッキリ言えば馬よりシュウの方が早く移動していることになる。

それを誰にも見られる事なく、1時間程で街道に出られたのは運が良いのか悪いのかシュウにはまだわからない。

「どっちに向かうかな」

シュウは街道をどっちに進めば街に近い事を知らないで近くに落

ちていた木の棒を立て倒れた方向に進む事にする。

運任せ、風任せだと思うがこの世界の事を知らないシュウにとっては数少ない選択肢の一つだ。

魔導機兵で一氣に街道を進んでも良いが、この世界の科学技術、魔法技術も知らない状態で魔導機兵に乗って移動した場合、警戒され、身分が不明なシュウは攻撃される可能性もあるし、利用しようと捕まえる可能性もある。

戦わないで済むならその方がいいし捕まるつもりもない。

巨大猪を倒してから街道に出るまでの間は特に何かしらの障害に出会う事もなく、あの猪は突発的な事態だと考えられたのでシュウはノンビリと街道を歩く事に決めた。

もちろん、最低限の武装はしているが。

そして、そんなシュウを呼びとめる人間は意外と速く訪れる事になる。

「よお、兄ちゃんちょっと待ってくれよ」

太陽が高くなり、そろそろ昼食の時間だと思っていると街道横にある林から声が飛んできた。

シュウが声の方へ顔を向けると薄汚れた恰好の男が5人出てくるなりシュウを取り囲む。

どの顔も何が楽しいのか下衆な笑いを浮かべ手には錆びた両刃の剣を持って威圧している。

リーダーと思われる一際体格の良い男が一步前に出てくる。

「俺達は命まで取ろうって訳じゃねえんだよ。大人しく、金と今着ている服を置いて行きな」

そう言っただけで囲む範囲を狭める男たち。

金を出せと言われても、シュウはこの世界の金銭を持っているか知らない。

メニューで確かに金はあるが、本当に使えるのか知らないし、行き

成り脅迫してくる相手に出す気もないし、露出狂の気もない。

異世界に来て初めて会った人間が盗賊の類だと思つと先が思いやられるとシュウは思う。

「いきなり出てきて金と服を出せと言われて大人しく出すと思ひます？」

至極まっとうな意見とは時として他人を怒らせる場合がある。まさにこの時ほど当てはまる場合もないだろう。

大人しく差し出すと思つていたのだろう、周囲にいる男たちは顔を赤くして目つきを鋭くする。武道の達人とかなら殺気を感じると思うが、一般人のシュウには殺気を感じるスキルは無い。魔導機兵で狙われた時は、不意打ちをカンで動いて回避に成功したりする場合もあるのに不思議だと思ふ。

「だつたら死ね！」

リーダー各の男が叫ぶと周りにいた男たちは剣を振りかぶつて襲いかかる。

シュウは慌てる事なく魔法による身体強化及び防御力向上の魔法をかけた。ゲーム時代に白兵戦で戦つたプレイヤーもモンスターも盗賊達の動きより全然早く、攻撃は鋭い。ハッキリ言つて目を瞑つていても避けられると思えたが、痛い思いはしたくない。魔法はあくまで保険として使い、素早く包囲を抜け10メートル以上離れた場所に移動する。

剣も持たない、見たことの無い鉄の棒を持っているだけの無力だと思つていた男が一瞬で消えた様に盗賊達には見えたのだろう完璧にシュウを見失つていた。

殺しに来た相手に遠慮するシュウでは無い。既にここは日本でも無く、ゲームでもない。異世界であり、殺さなければ殺されるという現実がある。

だから、シュウは肩に提げたアサルトライフルを構え安全装置を解除。初弾を装填し銃口を盗賊に向けて引き金を引く。

タタタンッ！

乾いた音が響く3点バースト。前方にいる盗賊の一人が血を撒き散らして倒れる残った盗賊はいきなりの反撃に固まる。

誰かが「魔法使い…」と呟いた様に聞こえたが、「だから何？」とでも言うようにシユウは何度も引き金を引く。盗賊を皆殺しにするのに1分とかからなかった。

「あー…失敗した」

盗賊を皆殺したシユウは一人落ち込んでいた。

殺した事に後悔したのではなく、殺す前に街までの距離を聞いておけばよかったと思ったのだ。

未だに街道の先には何も見えてこないし、民家でもあれば色々と聞いてみたいのだが、盗賊が出る様な地区だし、期待は出来ないだろう。

盗賊達の服装から、今着ているパイロットスーツが違い過ぎるので一応アイテムで持っていた似た服を取り出し着替えもした。

そうしてトボトボと歩き続け坂を登りきると前方に巨大な壁に囲まれた街が見えた。

まだ遠いが今日中に辿り着ける位置に街があるのは厭がおうにもテンションを上げる物らしい。

再度魔法で移動速度を上げ人間には絶対出せない速さで街まで走る途中で門前に中世ヨーロッパを思わせる兵士と、やはり同じ時代の鎧を着けた巨大な人型が巨大な両刃剣を地面に立て、柄に手を置いて直立しているのが見えた。

魔導機兵という文字がシユウの脳裏に浮かぶがシユウの知っている魔導機兵とはイメージが全体的に違う。

シユウが使う魔導機兵は、現代の兵士と感じるが、前方に見える魔導機兵らしき物は騎士というイメージがピッタリだ。

「この世界でも巨大兵器はあるのかぁ…」

分解したい解析したい、どれだけ力があるのか調べたいとシュウは思うが、素直に調べさせてくれるとは思えないし、教えてくれると言えは何かの詐欺だと思う。

まだ門まで距離はあるが速度を落として歩く事にする。

何が起こるか分からない今は使わない方が無難だと思ったからだ。

そして、それは正解だった。

門の前では10人以上ならんだ列が2つ出来ており、兵士の誰何を受けている。

魔法で勢いよく向かっていたら注目を浴びて要らない警戒をされる可能性がある。

シュウも列に並び前にいた30代と思われる口髭を生やした男に話を聞こうとして声をかけた。

「すみません、あの人は何をしていますのでしょうか？」

「ん？ああ、あれは街を訪れた目的と税金を払っているんだよ。知らなかったのかい？」

「ええ、田舎から出てきて街に行くのは初めてなんですよ」

「ハハハ、そうなのかい？実は、俺も最初は知らなくて驚いたもんだ」

男は自分をペイリと名乗り税金は5Gだと教えてくれた。ガラム

そして不慣れなシュウを助けようと宿屋を紹介してくれる事になった。

どうやらシュウの様な者は珍しくないらしく、これが初めてでは無いらしい。

ここは「海鳥の翼」という名の宿屋兼酒場。

ペイリに紹介された宿屋がここだった。ペイリは実家が、このマイウスという街にあるらしく宿屋の前まで連れて来てくれた後で別れている。

一泊朝食付きで20Gで晩御飯は5Gと宿屋の親父が教えてくれた。

それで構わないと言って通されたのが今いる部屋だった。

ベットが一つと机と椅子が1脚。机の上には水差しの壺が置いてある。ビジネスホテルと思えば安すぎると思うが、一般的な宿屋だとペイリから言われたので、それを信じるしかない。

外は既に暗くなっており、空腹を感じたシユウは下の酒場で食事を取る事にした。

部屋を出て廊下を歩き階段を下りる最中に酒場の喧噪が聞こえてくる。

笑い声、どなり声、何を言っているのか呂律が回っていない声が聞こえる。

テーブルは全て埋まっており、開いていたカウンターの席へ座った。すると、給仕をしていた茶色の毛並みを持つエプロンを着けた猫耳を生やした女性が声をかけてきた。

「お待ちせしましたニヤ。何をお持ちしましょうかニヤ？」

そう言つてメニュー表を示す。見た事も無い文字だが不思議と読む事は出来る。しかし、書いてある食材の名前と調理方法だろうか、聞いたことの無い名称が並び何をどう調理しているのか想像もつかない。

だからシユウは無難な答えを口にした。

「え…っと…お勧めつてあります？」

「それだったら、今日の日替わりメニューですニヤ。お飲物はどうしますかにゃ？」

「お酒以外なら…」

「わかりましたニヤ。ちょっとお待ちくださいニヤ」

そう言つて奥へ消えていく猫耳女性。

その後ろ姿を見つめシユウは大きくため息をつく。

（ある意味覚悟はしていたけど…本当にいるとは…。しかも、語尾がニヤですか…）

シユウは姉妹神と会い、異世界へと来た時から人間以外と会う可能性も考えていた。

今まで読んできた小説やゲーム等でも獣人と言われる種族はいるし、エルフやドワーフ等の有名な亜人もいる可能性も考慮していた。

しかし、想像は想像であり、現実を現実として受け入れると、ここまでショックが大きいのかと思った。さっきの会話も殆ど何も考えずに行っており、日替わりメニューが何なのかも聞いていないのに注文してしまった。

そう悩んでいると数分もしないうちに猫耳女性が戻ってきた。

「お待たせしましたニャー。温かいうちに食べるといいニャ」

パンと思われる物体が2個と、サラダ、焼いた大きな肉が2枚、柑橘系の果物を絞ったジューズらしきものが出された。

（一体なんの肉と野菜なんだろう…）

周りの人も食べているし毒は無いだろうが、やはり食材がシユウは気になる。

シユウを見ている猫耳女性は「さあ、どうぞ」と目で訴えており、これを食べないという選択肢をシユウから奪っている。

ナイフで肉を切りフォークに刺して恐る恐る肉を口へ運ぶ。

「ん…美味しい！」

思わず漏らした呟きを聞いた猫耳女性はエヘン！と豊かな胸を張ってシユウを困らせる。

「このお肉美味しいですね。何の肉なんですか？」

「これはバルバロのお肉ですニャ」

（うん…聞いてもわからん…）

「そうなんですか。ハハハ」

「ニャハハハ」

乾いた笑いを浮かべ愛想笑いをしてしまうのは仕方無いと思いたい。食べ続けていると、猫耳女性はシユウの全身を見て疑問に思ったのだろう声をかけてきた。

「そういえば、お客さんは何をしている人なんですかニャ？商人には見えないし、兵士にも見えないから冒険者ですかニャ？」

「ん…今は無職かな。その冒険者っていうのに興味あるけど」

「だったら、明日にでもギルドで登録をしてくるといいニヤ。ニヤーもこの仕事が休みの時は冒険者ニヤ」

「そうなんですか。だったら、先輩ですね。えーっと…」

「ニヤーの名前はタマールと言うニヤ」

「私は、シユウと言います。よろしく、タマールさん」

「ニヤー、よろしくだニヤー」

タマールさんそのまま話を続け、冒険者ギルドについて詳しく聞いた後タマールさんは仕事へ戻っていった。

タマールさんの話では、冒険者とは何でも屋と同じらしく盗賊退治やモンスターを倒す戦闘の他にも薬草や珍しい植物の採取、手紙を届けたりする配達の仕事があるらしい。

ギルドへ登録すると何度も街を出る場合がある為に街に入る時に払う税金が免除され、上級ギルド員のみが受けられる依頼は高額な報酬が約束されているらしい。

シユウは既に持っているお金が使える事を知っている。そして今のシユウに必要なのはお金では無く、情報という見えない物だった。

それを考えるとギルドという存在は情報を集める事にも、旅を続ける事にも条件を満たすと思える。

食事を終え、人心地付いたシユウは部屋に戻りベットに横になると冒険者ギルドへ行く事を決め、その日は速く寝る事に決めた。

翌日の朝、タマールさんから教えてもらった冒険者ギルドへ向かう昨日、街に入った時は案内してくれていたペイリさんの後ろを追いかけていたので周りを見る余裕がなく気がつかなかったが、こうして一人で街を歩くと人間以外の種族が多くいる事がわかる。

二足歩行する犬や猫。昨日出会ったタマールさんは人間に近い容姿だったが、今すれ違ったのは、文字通り二足歩行する猫だった。

血の濃さで変わるかもしれないし、タマールさんは人間とのハーフなのかもしれない。

そんな人間(?)観察をしながらギルド前に辿り着く。

両開きの扉を開くと中にいるのは数人の男女がおり、右の壁にはビッシリと紙が貼られ、左は階段になっていた。

正面にカウンターがあり、職員らしきウサギ耳を持つメガネをかけた女性が座っていたのでカウンターまで歩き話を聞く事にした。

「いらっしやいませ。本日はどのような御用件でしょうか？」

「えと、冒険者の登録をしたのですが」

「では、こちらの用紙に記入をお願いします。記入が終わりましたら、またここまでお越しく下さい」

「わかりました」

シユウはペンを貸してもらい書こうとするが、ここで一つ困った事になる。

この世界の文字は読めるが、書けないのだ。

固まっていると受付嬢は首を傾げて眼で問うてくる。だから、正直に言う事にした。

「あー…すみません。私は文字を書けないんです…」

顔を赤くして言うと、クスッと受付嬢は笑い大丈夫と頷く。

「代筆屋さんは隣にいますし、ギルドと提携しているので無料ですから大丈夫ですよ。戻って来た時に、ミランダという名前を出してもらえれば私が出ますのでご安心ください」

この世界では文字を書けない事も珍しく無いのか、すぐ近くに代筆屋が存在した。

そういえば、免許を取りに行った時も試験場の隣に代筆屋があったなあと思いつながらシユウは代筆屋で書類を書いてもらった後に戻ると、再度カウンターに行きミランダさんと呼んでもらう。ミランダさんに渡した書類は問題なく受理され、一つの水晶を渡された。

「この水晶を握って魔力を込めてください」

言われた通り水晶を握り魔法を使う時の様に魔力を込める。

すると水晶の中に青い結晶の様な物が生まれ水晶が二つに割れた。

驚いているシユウを余所に水晶は水あめの様に変形し丸い二つの球体になって固まる。

ミランダさんは、二つに割れた水晶の一つを受け取り説明を始めた。
「水晶の一つをギルドが管理、もう一つをシュウさんが御自分で管理してください。その水晶がシュウさんのギルド内での身分証明書になります。この水晶は他の街にあるギルドでも有効ですので紛失には十分気を付けてください。再発行は200Gと少し高いですし、免許証のカードが水晶になったと思えば分かり易いだろう。再発行に今泊まっている宿屋の10日分の料金だと思つと確かに懷に痛いと思う。」

「わかりました。気をつけますね」

「ハイ。毎年何人の無くす方がいらつしやるので気を付けてください。それと、今日から依頼を受けることは可能です。依頼が書いてある紙と水晶をカウンターに提出していただければ係りの者が説明させてもらいます。その説明と報酬でよければ依頼を受けたという事になります。それと、依頼のなかには期日が決められている物もあるので選ぶ時には注意をしてください。もし依頼を果たせずにいると違約金が発生する場合もありますので。詳しい事はこの初心者ガイドに書いてあるので一読してください」

「なるほど。ありがとうございます」

シュウは分厚い電話帳の様な本を受け取り一度宿屋に戻る事にした。本が以外と重かつたし、他にも見ておきたい場所があつたからだ。詳しく言えば門の前にあつた魔道機兵らしき物を作っている現場や薬品を取り扱っている店などだ。魔導機兵の装備を新調できるかどうかを確かめる必要があるし、硫黄などの火薬を生成する為の材料があるか確かめる必要があつた。

アイテムとして火薬や各種薬品、合金のインゴットを持っているが確保できる目処が無いと幾らあつても足りないと思えない。その為に宿屋の親父さんに場所を聞かため戻る事を決めたのだ。宿に戻つて荷物を置いた後、一階の酒場を掃除していた親父さんを見つけ話を聞いていると休憩時間中だったタマルさんが案内してくれるという話になり二人で出掛ける事になった。

「ここが鍛冶屋ですか…」

「そうニャー。ここらでは一番腕が良いって言われている処ニャ」

シユウがタマルさんに案内された場所は、まさしく鍛冶場だった。ハンマーで熱した鉄を叩く鍛造。鑄型に溶かした金属を流しこむ鑄造を目の前で行っている。

「タマルさん、門の前にいた大きな人型の騎士は何と言うんです？」

「あれは巨神兵ニャ。あれ1騎で100人の兵士を相手に出来ると言われているニャ」

（なるほど…巨神兵ですか…。何か、巨大な蟲が出てくるアニメを思い出すのはデフォなのでしょうか…）

そんな事を考えている場合では無いと思い、シユウは核心を訪ねる。「巨神兵の部品もこの鍛冶場の様に作っているのですか？」

タマルさんは少し悩んだ後に分からないと答える。

「巨神兵は国が管理しているから、ニャー達みたいな一般人は分からないニャ。兵隊さんになれば分かるかもしれニャいけど…」

「うーん…困りましたねえ。それを知りたかったのですが…」

「ニャー…」

二人して悩んでいると、立派な髭を生やしたシユウの半分程の身長だが太い腕をもったドワーフが近づいてきた。

「おう、そんなに悩んだ顔してどうしたってんだ？」

野太い声がシユウにかけられる。

ドワーフの後ろにいる若者が親方と呼んでいた事から、この鍛冶場の責任者なのだとシユウはすぐに理解できた。

「いや、巨神兵に興味があってどうやって部品を作っているのか知りたかったんですよ」

シユウが素直に答えると、親方と言われたドワーフの目付きが鋭くなる。

「お前さん、巨神兵に興味があるってなんでだ？あれは人殺しの道

具だぞ」

「道具が人を殺すんじゃないですよ。使う人間が殺すんです」

ゲームだが魔導機兵を使って戦争をしていた人間が言う台詞だと思わないが、あくまでゲームであり本当に人を殺すつもりはない。なによりシュウの興味は設計や開発にあって効率よく敵を倒せるより、どこまで試せるかと思って作っていた。それが結果的に強力な兵器になってしまっているわけだが、無責任だが本人は気にしていなかった。

シュウの答えにドワーフの親方は唖っていたが、最終的に答えてくれた。

「ふむ…。まあ、それ位ならいいだろ。巨神兵が着けている鎧とかは俺達が鉄を鍛えて成型しているのさ」

「…なるほど。ありがとうございました」

シュウは深く頭を下げてタマールさんと鍛冶場をあとにする。

これでシュウが使う魔導機兵のパーツを確保できる可能性は限りなく0に近くなり、薬品を扱う店に行って取り扱っている品物を見せてもらったが、これも空振りに近い。

最悪の場合、最初から自分で使う工場を造る可能性も考慮するべきかもしれない。

思ったより深刻な状態を悩みながら歩くシュウの隣にいるタマールは先ほどからシュウを見つめ心配そうな顔をしていた。

そして前を歩いてきた身形の悪い男とぶつかる事になる。

「どこ見てんだコルア！」

そう怒鳴る細身の男。

タマールは只管謝っているが、まるで聞いていないようだ。

ここでシュウはタマールさんの様子が普通では無いと思った。

幾らなんでもタマールさんの態度が低姿勢過ぎるのだ。このまま土下座でもしかねない程に恐縮している。

そして反対に男の方は高圧的な態度を崩さない。

「猫人風情が人間様に打つかつておいて、謝るだけとはな。可愛い顔してるじゃねえか。ちよつとこっちに来いよ。色々と償ってもらうからな」

そう言つてタマールさんの腕を握り露地裏へ連れ込もうとする。

「ニヤツ…許してくださいニヤ…」

タマールは目に涙を浮かべシユウを見る。

（そんな涙を浮かべた眼で見なくても大丈夫ですよ）

シユウはタマールさんに優しく笑顔を浮かべ一度頷くと、引つ張つていこうとする男の手を掴んで外す。

「んだコルア！」

男はシユウを威嚇するような顔と声を向けるが、シユウには届かない。

そんな脅しで引つ込むなら最初から手を出すつもりもない。

「まあ、ここまで謝つてますし許してあげましようよ。ね？」

まるで幼子を宥めるように男に話しかける。

男は更に激昂してシユウの顔を見ようとして固まる事になる。

シユウの口調は優しいが、その瞳だけは鋭く次は殺すと無言の重圧を放っていたからだ。

この世界に来て既に盗賊を5人殺している。相手は犯罪者だし、正当防衛に当たると思うが今更1人殺してもシユウは何とも思わないと心に決めている。

この世界で殺されかけたら相手を確実に殺した方が安全だと既に学んでいるのだから。

だから、脅しなら一度は許す。だが、二度目は無い。

「私からも謝りますから。この場は退いてくださいよ」

その後に続く、“死にたくないなら”という言葉をも男は正確に読み取り、次は気をつけると捨て台詞を吐いて逃げるように遠ざかった。シユウは笑顔で男に手を振る。

「シユウさん、ありがとニヤ…。助かったのニヤ…」

シユウは苦笑を浮かべて顔を向ける。

「御気になさらず。でも、タマールさん疑問なのですが、なぜそこまで謝ったんです？あの男にも非があるでしょう？」

「それは…私が獣人だからニヤ…」

この答えに首を傾げるしかないシユウ。

（獣人だから？迫害でもされているのかな？）

映画や小説などでも獣人や亜人が人間種に迫害されている内容はあるし、まったく無い場合もある。そこまで思い至り可能性を考慮しなかった自分の迂闊さに気が付いた。

「今は昔よりも迫害とかは少なくなっただけ、消えたわけでは無いニヤ…。逆にシユウさんみたいに丁寧な対応してくれる人は少ない位ニヤ…」

「あー…ごめんなさい。嫌な事を聞いてしまいました…」
タマールさんは首を横に振り気にしていないという。

「ニヤーはまだ幸せな方にや…。性奴隷として売られる事もなかったし、今は市民権を得られて冒険者にもなれたのニヤ…」

（あー…中世辺りの価値観なら奴隷もありか…。でも、嫌だなあ。
俺だったら…）

ここでシユウの脳裏に姉妹神の言葉が蘇る。

「貴方がどう生きようが私たち神々は肯定する。この世界に住む人間達を皆殺しにしようが、導こうが私たちは肯定する」

その言葉を小さく呟き、無意識に自分のやる事が決まった気がした。シユウの行動は神のお墨付きをもらっている。後は実行するか、辞めるかの二つ。

そして、シユウの答えは既に決まっているが今一步を踏み出せない。だから、その一步を踏み出す為の答えを得る。

「タマールさん…馬鹿な質問かと笑うかもしれませんが、答えてもらえますか？」

「何ニヤ？」

「獣人も亜人も人間も差別されない国があつたらどうします?」

「ッ…それは…。うん…それは、ニャー達が一番欲しい物ニャ…」
この答えにシユウが全てを掛ける決意は決まった。

これが、後に巨神王という英雄が治める国の始まりになる。しかし、後の歴史家たちを大いに悩ませるこの国に名はない。

歴史家達は俗称として、国の英雄の戦い方から G U Z O F P A
T R I O T (愛国者の銃) という名で呼んだ。

タマールの答えを聞いた2ヶ月後、この世界の地図を手に入れ検討を付けた遠方まで行く依頼をこなし続けた。

依頼の条件は、開墾が未だに上手くされていない代りに肥沃な大地で海が近い場所だ。

当然、そんな好条件の土地は殆どないが、ただ一カ所だけ残されていた場所がある。

広大な森が海まで続き、冬でも豪雪にならず起伏も殆どない東アルマダという土地だった。

東アルマダは強力なモンスターが跋扈する土地だったが当然、今シユウがいる街を支配する国、ローゼリア帝国は何度も遠征軍を送って支配しようとした。

しかし、巨神兵を持っても倒せない強力なモンスターに出会い全滅の憂き目に会っている。

そこで帝国は考えた、東アルマダに生息する最強のモンスター皇殻亀を討伐した者に貴族の称号を与え、東アルマダの土地を下賜すると。

帝国は国軍の損失を出して国力を衰退させるより、いくら死んでも痛く無い冒険者が皇殻亀を倒せば後はどうとでもなると思ったのだろう。

帝国から代官を派遣し、倒した本人は帝都へ呼び寄せ傀儡にする事も出来るし、暗殺してもいい。

シュウは、貴族になるつもりは無いが、広大な土地を建前上だが合法的に手に入れられるその情報を掴むとすぐに行動した。

東アルマダに一番近い村で王殻亀の情報を集め、山のように巨大な亀だと知る。そして、その甲羅はどんな剣や槍でも貫くことはできないと。

シュウは所持している魔導機兵で一番貫通力に優れた武装を持つ「ヴァンゼ04」の機体調整をし、重武装で身を固め皇殻亀を倒しに向かう。

「さて、行きますかっ！」

シュウは気合を入れ魔導機兵に乗り込んで森に入る。

5分もしない内に来るのを待っていたとばかりに数々のモンスターがシュウに襲いかかってきた。

シュウの操縦するヴァンゼより巨大で3本角を持つ牛、ヴァンゼと同じ大きさで三つの頭を持つ地獄の番人と言われるケルベロス、何十メートルもある百足。

何より大空を飛びまわり火を噴くドラゴン。

伝説上の生き物や、修治が居た世界に存在しない生き物が間断なくシュウを襲ってくるが、シュウの歩みは止まる事を知らない。

戦うシュウに取っては出てくる全ての敵は生き物であり、生き物には必ず弱点があるとわかっているからだ。

ぶ厚い皮膚と筋肉を持つ牛だろうが、目で獲物を追い攻撃するなら眼を潰せばいいし、脳髓を吹き飛ばされて生きている生物はいない。銃の狙いを付け、目と脳髓と一緒に吹き飛ばす。

剣も矢も魔法も効かない固い鱗を持つドラゴンだろうが700mm以上の鋼鉄を貫通するロケット弾の威力を防げる道理はない。

弾数は限られているが、倒しきれないという事もないし小型のモンスターは踏みつぶすか対人兵器を使えば簡単に倒せる。

モンスターの大半は爪や牙等の攻撃手段しか持っておらず、素早い
が近づく前に倒せば脅威でも何でもない。そして、近づけさせない
だけの弾幕を張る余裕は十分にある。

シュウが森の奥にいる皇殻亀に辿り着くのに時間は掛からず、シュウが通った道には夥しい数のモンスターの死骸が転がって血の川を作っていた。

「さてはて…でっかい亀ですね」

シュウの目の前にいる皇殻亀は高さ30メートル、尻尾の先端まで入れれば100メートルを有に超える巨体を誇っていた。

「勝てるのかこれ…？」

シュウもここまで巨大だとは思っていなかった。

今まで出てきたモンスターから予想して、せめてこの半分位の大きさで十分対応できると思っていたが予想は大外れだった。

「でも、やるっきゃないよね…」

皇殻亀は動かずにその巨体を晒している。

シュウは正面からバーニアを吹かし高速移動で皇殻亀の右脇に移動しながらロケット弾を打ち込む。

噴煙を残しロケット弾は狙いたがわず皇殻亀の甲羅に直撃し、その威力を遺憾なく発揮するが巨体と比べ、その威力はシュウが見ても心もとない。

しかし、今一番貫通力がある武装はこのロケット弾だ。

これが効かないのなら打つ手がなくなるシュウは愚直に攻撃を続ける。

すると皇殻亀も流石に効いたのだろう、身ぶるいをし、その巨体を支える脚を動かし反動をつけた勢いで尻尾を振ってきた。

壁のように迫る一撃をシュウはバーニアを全力で真下に吹かし機体を20メートルの高さまで浮かして避ける。

「あぶねえ…一撃喰らったら終わりだわ…」

バーニアを切り、着地する寸前に再度浮力を得て衝撃を殺しすぐさま後ろへ後進しながら攻撃を再開する。

ロケットの弾数は残り30程。今のペースで撃ち続ければ2分もたない。

弾薬の補充は魔導機兵を収納し一定時間経たないと得られず、今戻せば別の魔導機兵に乗り込む前に殺される。

スキルを使えば弾薬を一瞬で満タンに戻す事は可能だ。しかし、このスキルは魔力の半分を消費する為、今使えば森に入ってから戦闘を続けた為に減っている魔力が枯渇し魔導機兵を操縦する事も出来なくなる。

「くそ…ここまで来て万事窮すか…」

一旦退却する事がシウウの脳裏をかすめる。

ここで死ねばゲーム時代とは違い本当の死が待っている。

ホームポイントに戻る事もなく、無残な死体になった想像が臉に幻影のように映る。

そして、戦場で戦闘以外の事を考えるという普段はしない事をした結果は無情にもシウウに襲いかかってくる。

皇殻亀は、その巨大な体躯を信じられない程の機敏さで廻し頭をシウウへ向けたのだ。

「なっ…」

素早い動きで王殻亀が行ったのは、強靱な顎を持つ巨大な口を開き、シウウの乗る魔導機兵の上半身を飲み込み、両足を噛み切る事で完結する。

バキバキッと簡単に魔導機兵の足を断ち切り、口の中に入ったシウウは魔導機兵の上半身と共に王殻亀の体内へ取り込まれた。

シウウは暗いコックピットの中で目を覚ます。

頭痛がして手で頭を撫でればヌルとした感触と血が持つ独特の鉄臭い匂いがした。皇殻亀に飲み込まれた時から記憶を無いことを考

えると頭を打って気絶していたらしい。

「クソッ！」

シュウは自分の不甲斐なさに罵声を上げる。

強力な武器を持ち、高性能の機体を操ってモンスターを簡単に倒していた事がシュウに油断という毒を本人の気がつかないうちに侵食し、慢心という言葉が支配した事に気が付いたからだ。

「情けねえ……」

反省するのは後でも出来る。今は生き残る事を最優先に考えるべきだ。

シュウは直ぐに魔導機兵の状態を確認し、両脚損傷、背面武装使用不可という事実をかみしめる。

残る武装は腕に装備された盾に眠る40mm二連装マシンガン×2。魔導機兵の乗り換えを考えたが暗視装置に映る映像から断念する。垂れてくる液体が機体に落ちると、煙を上げて溶けているのが見えたからだ。

ここまで強力な消化液を生身で受ければ、一瞬で生身等溶けて消えてしまうだろう。

「どうする……どうすればいい……」

頭を抱えて悩むが答えは出てこない。

どう考えても生き残る術は無いと思えた。

「まさか、ピノキオみたいに生きたまま飲み込まれるとは……ん？」
何気なく呟いた言葉にひっかかりを得た。

「キノピオはどうやって脱出したんだっけ……」

20年以上前に聞いた童話を必至で思い出す。使える手だと思えたからだ。

「クジラの中で火を焚いて……」

シュウは視線を周囲に彷徨わせる。だが、燃やせそうな物は何一つない。

皇殻亀の内臓が蠢いているだけだ。

しかし、シュウはゲーム時代に得た大量の物資がある。

「大盤振る舞いで行くか…」

火気厳禁と何重にも貼られている2メートル四方の木の箱を20個、機体の前に出し、10メートル前方に投げる。

箱の中身は、弾薬や火薬、ガソリン等の爆発物。燃える物は木材で無くても大量にシュウのアイテム欄には入っている。

シュウが取り出した弾薬はヴァンゼの全武装の2倍の量だ。

爆発で死なない様に残った両腕を使いコックピットの前を十字になるように盾で守り、頭部にある対人用8mmバルカンの狙いを付ける。

「ふー…運任せの博打は好きじゃないけど、やりますかー！」

パパツと頭部から発射された弾丸は狙いたがわず積まれた爆発物に命中し。

光に音がするのならば、カツ！と聞こえただろう。

モニターが一瞬に光で塗りつぶされ、続いて衝撃が機体全体を襲う。

「うおおおおお！」

シュウの叫びは、遅れてやってきた爆発音に掻き消されシュウ本人にも聞こえなかった。

それから6日後、帝都の中心にあるガルアム広場は普段、露店が並び買い物客で賑わっているが、その日のガルアム広場は静まり返っていた。

広場の中心にある噴水の前に、一つの巨大な頭蓋骨が置いてあったからだ。

そしてその前に1組の男女が立っていた。

噴水の前にあるのは皇殻亀のかつて頭部だった物であり、前に立っている男女はシュウとタマルだった。

帝都の場所を知らなかったシュウは一度マイウスの街まで戻り、タマルに相談した。するとタマルもギルドの依頼で帝都へ行くと言うので同道する事になったのだ。

タマルはシュウが巨神兵（魔導機兵）を持っている事に驚き、そ

の速さに更に驚愕した。変え馬を準備して昼夜問わず全力で移動しても10日かかる日数を2日で踏破したのだから、当たり前だった。

そしてシュウ達が帝都へ着いた日、普段通り露店を出そうと広場へ向かった商人たちはいきなりの事態に準備も忘れ呆けるように立ち尽くす事になる。

日が昇り、仕事に出かける者、買い物に来た者も等しく同じ状態になる。

恐る恐る、初老の男がシュウとタマルへ声をかけ、この骨は何なのかを聞き王殻亀の頭蓋骨だと答えたシュウを驚愕の眼差しを向け言葉を失う。

シュウの答えを聞いた周りの者たちも信じられないと呟き、見なれぬ髪をしたシュウと隣にいるタマルを見つめ続けヒソヒソと話合っている。

何と無く居心地が悪く感じたが、30分程で白い鎧を着て馬に乗った集団がシュウの目の前に来た。

騎士たちは離れた所で一様に目を見開き、固まる。そして、そんな集団の中で一人だけ固まらずシュウの前に馬を降りて歩いてきた男がいた。

「帝国騎士団団長のクリフだ。お前が皇殻亀を倒したのか？」

「私はシュウと申します。御察しの通り倒したのは私です」

「なるほど…。シュウ殿、一つお聞きしたいのだが一体どれほどの人数で倒したのか教えてくれないか？」

「一人でですが…」

「なっ…。いくら巨神兵あったとしても一人で倒せるわけないだろう！」

「いや…倒せるわけないと言われても倒してしまったのですが…」

「…まあ、いい。着いてこい城へ案内する」

「わかりました」

クリフは城へ移動する間も何度も王殻亀を見つめ、シュウを見ると

首を横に振る。さっきの会話と良い嘘だと思っているのだろう。

タマールさんは待つていると言うので、城へ向かうのはシユウとクリフ、そしてクリフの部下数人だった。

「見かけない髪の色だが、どこの国の物だ？」

「えー…それは秘密です」

「冒険者に過去を詮索することはタブーだったな。聞いた私が悪かった」

「いえいえ、気にしてませんよ」

自分は異世界から来たとは間違えても言えない。証明しろと言われて、この場で魔導機兵を出したとしても問題にしなければならないだろう。ここは嘘で乗り切った方が良いと思えたからだ。

この国の巨神兵が束になっても敵わないモンスターを単身で倒したとなれば、極論この国で最強の存在という事になる。

シユウは内心失敗したと思った。

（どう考えても色々と質問されるよね…）

どんな武器を使い、どんな魔法で戦ったかを根掘り葉掘り聞かれる様子が用意に想像できた。

そんな事を考えながら他愛のない会話をクリフとしてっていると城の前に総白髪 of 髪を持つ金系銀系で彩られた服を着る恰幅の良い（主に横へ）男と真紅のローブを着て顔を隠した性別不明な人物が待っていた。

「貴様が皇殻亀を倒したと言っている者か？」

恰幅の良い男がそうクリフに聞き、頷いたのを確認するとシユウを見下した様な眼で見つめる。

「では、もう帰って良いぞ。報酬は後日渡す」

「ナツ…。ナイズル宰相お待ちください。この者は王殻亀を倒した英雄ですぞ」

シユウはそんな物なのかと思ひにしなかったが、隣にいたクリフが驚きの声を出した。

「陛下はご存知なのですか！帝国の英雄を蔑にしても良いと！」

「黙れクリフ。騎士団長風情が口を挟むな！」

「クッ…失礼しました…」

クリフは唇を噛み顔を俯かせる。そんなクリフを下らないとでも言うように鼻で笑って踵を返して城にナイゼルは入っていった。

「シユウ殿、申し訳ない。私から陛下へ確認を取るので逗留している宿を教えてもらえないか？」

シユウは帝都に来たばかりで宿を取っていない事を告げ、クリフの部下アンジェラという女性騎士が宿街へ案内する事に決まった。

シユウを案内した後で戻ってアンジェラが戻って報告する為だ。

アンジェラと二人並んで広場に向かいタマールと合流して宿へ向かっている途中、アンジェラはしきりにシユウの事を訪ねてきた。

「シユウ殿は、どこの国の方なのですか？」

「ずっと、東にある滅びた国ですよ。小さい国だったので名前を言ってもわからないと思います」

「そうなのですか…。では、どうやって王殻亀を倒したのですか？」

「ん…。それは内緒です」

「タマールさんも知らないのですか？」

「ニヤーはシユウさんが皇殻亀を倒す所は見えていないニヤ。帝都に来たのは偶然ニヤ」

アンジェラはシユウの答えを聞くと、まるで詐欺師でも見るような顔をする。

「本当に倒したのかよ」と目が訴えている。

そんなアンジェラを無視し、タマールと他愛もない会話を楽しんで『獅子の尻尾』という立派な宿屋へ辿り着く。

「帝都で一番立派な宿屋です。団長からお金はもらっているんで、料金は安心してください」

そう言ってシユウ達の背中を押し、宿屋の中に入る。

中に入ると、すぐさま絹の服を着た小太りの中年男性が出迎えた。周りで働いている従業員の服装と比べて上等な事から店の主人なのだろう。

薄くなった頭皮が窓から差し込む日の光を浴びて光っているのも實
禄があると思えるから不思議である。

「ようこそいらっしやいました。本日は、どのような御用件でし
ょうか？」

「こんにちは。部屋を借りられるかしら？えーっと…」

アンジェラはシュウとタマールを見て首を傾げる。

それにピンっと気が付いた。

「あ、2部y」

「1部屋でお願いするニヤ！」

シュウが答えようとすると、横にいるタマールが被せるように答え
る。

シュウがタマールへ眼を向けると、目が合いタマールは頭の上にあ
る耳と顔を真つ赤に染め俯いてブツブツ呟いている。

シュウに聞こえた内容は「2部屋なんて勿体無いニヤ…。同じ部屋
で寝て間違いが起こつても望むところにや…」

後半部分はシュウには聞き取れなかったが、本人が良いと言うなら
良いのだろう。特に気にしない事にする。

前金でアンジェラが主人に布袋を渡し、主人が呼んだ小姓がシュウ
とタマールを2階へ案内すると言うのでアンジェラは城へ戻ってい
った。

「ここがお部屋になります」

シュウは部屋の中に入り部屋の中を確かめる。

案内された部屋は広く、5人寝ても余裕がありそうなベッドが一つ。
大きな窓からは日光が部屋の中を暖かく照らし、窓の前にはテー
ブルと椅子が4脚おかれ、お茶を飲むのに良い感じだった。

他にもよく磨かれた家具が数点おいてあり、普段シュウが止まっ
ているマイアスの宿屋に比べれば天と地の差もある。

「良い部屋ですね。十分広さもあるし、これならユックリできそ
うです」

案内してきた小姓へチップを渡すと、元氣よく「ありがとうござい

ます」と笑顔を浮かべ戻っていった。

そして合方のタマールが、未だ部屋に入らず廊下にいる事が眼に入った。

「あれ…タマールさん？」

シユウが視線を向けるとタマールは口を開けて廊下からボンヤリと部屋の中を見て固まっている。

「タマールさん？」

近づいて顔を覗き込むように呼ぶとタマールはビクツと震え、目に光が戻る。

「ニヤツ…ニヤニヤ…ニヤーツ！」

「いや、落ち着いてください…。どうしたんです？」

「ニヤ…ニヤーはこんな良い部屋に泊まる事なんて今まで一度も無かったニヤ…。だから、驚いてしまったのニヤ…」

「なるほど…。でも、部屋に入らないと他の人にも迷惑ですからね」「さあ、こつちへ」と、タマールの手を引き部屋の中に招き入れる。タマールの頬が赤く染まっているが、慣れていない部屋に入る緊張からだろう。

椅子に座らせ、置いてあったコップへ水を入れ差し出す。

「これでも飲んで落ち着いてください。それよりも、何か食べに行きますか？」

タマールは水を飲むと首を横に振る。

「お腹は空いてないニヤ。ただ、ニヤーにはシユウさんが不思議で仕方ないニヤ。海鳥の翼みたいな安い宿に平気で泊まっていたと思ったら、こんな高級宿の部屋も普通に使える。巨神兵を持っているのも内緒にしているニヤ。王殻亀さえ倒すような強い人で、ニヤー達みたいな獣人を差別してないニヤ。まるで別の世界の人みたいニヤ…。」

（…ッ。タマールさん正解です…）

「ハハハッ。別の世界ですか…」

タマールの言葉に冷たい汗が背中を流れるが、笑って誤魔化す。

獣人だから、野生の感というのを持っているのかもしれないと思う。
「では、少し昔話をしましょうか…。そうですねー…私の国の事で
も…」

（一度ガス抜きも兼ねて、少し話しておくか。機族との戦争もモン
スターって事にすれば問題無いしね）

「聞きたいニヤ。そうすればシュウさんの事を知れるのニヤ」

シュウはタマールの対面に座り、ゲーム時代の事を掻い摘んで話す。
自分は、この世界の巨神兵に当る兵器を作っていた事や、巨神兵を
駆って戦場に出たこと。補助魔法が使える事も話した。

「ニヤー…シュウさんの国では、そんなに凄い戦争をしていたのか
ニヤ…。それに魔法が使えるなんて凄いニヤー」

「魔法を使える人は少ないんですか？」

「簡単な魔法を使う人は多いニヤ。戦場で使える程ニヨ魔法使いは
少ないニヤ」

「じゃあ、魔法を使える事も内緒にしてもらえますか？」

「ニヤニヤ？何でニヤ？そこまで強くて魔法も使えるなら、きつと
高い給料で帝国に雇ってもらえるニヤ」

「内緒にしてもらった方が色々都合がいいからですよ。この事は
タマールさんしか知りませんからね？」

「ニヤー…？」

タマールは首を傾げ、シュウの真意を見分けようとする。

ただ、シュウの考えは単に余計な柵を欲しくないと思っただけ
なのだが、タマールには何か高尚な考えがあると思っただけのだろ
う。暫く考えた後、急に顔を赤くして頷いて黙っていると約束して
くれた。

「シュウさんはズルイニヤ…。ニヤーの気持ちを分かっているニヤ
？」

「え？何ですか？」

「ニヤんでもないニヤー！」

タマールは勢いよく立ちあがり、ベッドにもぐりこんで丸くなって

しまった。

その姿をシュウはポカンと見送り首をひねる。

「何かやってしまったのだろうか……？」

シュウの口から零れた呟きに答える者は、この部屋に存在しなかった。

第1話（後書き）

お読みくださり感謝感激です。

更新は不定期になると思いますが、それでも続けて読んで頂けると作者は泣いて喜びます。

次回の更新はなるべく早く行いたいと思いますが、現在リアルが忙しいので不明です。

誤字脱字の報告をしていただけると、作者は土下座して訂正させていただきます。

第2話（前書き）

PV500ユニーク100、お気に入り2件も頂けて作者は感動と緊張をしております。

読んでいただけた方、お気に入り登録していただけた方に感謝感激です。

頑張って面白く更新して行こうと改めて感じました。

もう寝るときは、足を向けて眠れないので布団の中で丸まって寝るようにします。

さて、今回は性的表現を含んでおります。

どこまで許される表現なのか、微妙ですが書いております。

言い回し、文才が無いので今回もgdgdですが、それでも読んで頂けると幸いです。

第2話

「さて…どうしたもんか…」

タマールの機嫌は、あれからも治らずシユウが話しかけても必要最低限の返事をする位だけでシユウを見ようとしなかった。

シユウには何故タマールが無視しているのか分からないが、怒っている事は理解できたので宥めようとしたが全て無駄に終わる。

そのまま夜も更け、お湯で体を拭いてから寝ようとしたが部屋にベッドは一つ。

ベッドにはタマールしか寝ておらず、余裕はまだ十分残されているが、怒っている女性の入るベッドに潜り込んでもいいものかシユウは悩む。

ベッドの前で悩んでいると毛布から頭を出したタマールがソッポを向きながら話しかけてきた。

「早くベッドに入ればいいニヤッ！夜は冷えるから風邪をひくニヤ」顔を赤くしてそれだけ言うと、またすぐに毛布を被って顔を隠す。

その可愛い仕草にシユウは苦笑を浮かべ、ベッドの端に入った。

「おやすみ、タマールさん」

目を閉じると小さい声で「ニヤー」と返事が返ってきた。

「それが、何でこうなる…」

ベッドに入った時、お互いに端の方で寝ていたはずだ。

それがいつの間にか、中央によっており、腕の中にタマールが向かい合って丸くなっている。

慌ててタマールを剥がそうとするがシユウのシャツを掴んで離そうとせず、無理遣り離そうとすると「ニヤーニヤ」と寝言を言う。

「起きているんじゃないのか…？」

何気なく呟いたがタマールの反応は無い。

頭部にある耳は垂れ、気持ちよさそうな寝顔をシユウに見せている。

しかし、今シユウには「可愛いなあ」と考える余裕はない。

離そうとしたが、逆に引き寄せられたせいでシユウの胸に柔らかい塊が二つ押しつけられたからだ。視線を向けると宿で寝る時は肌着になるのだろう、旅をしているときは皮鎧を着たまま寝ていたせいで気がつかなかったが、タマールの豊かな胸が薄着越しに谷間を作りシユウに見せている。

（おいおい…Cか？いや…Dか、それ以上はあるだろ…）

ハッキリ言えば、この時のシユウは色々と固まっていた。シユウも精神年齢は30歳の立派な男だ。女性経験もそれなりにあるし、この位で普通は同様しない。

しかし、今のシユウは初心な少年の様にどうすればいいか分からなくなっていた。

それは、この世界に娼館等がある事をシユウは知っていたが、一度も利用していないからだ。

何故か？

それは、修治の時に習った歴史授業でアメリカ大陸を発見したコロンブス達がヨーロッパに梅毒を持ち帰って爆発的に感染範囲が拡大し、感染者が続出した事を知っていたからだ。

この世界にも性病はあるかもしれないし、なによりそれが不治の病だった場合を考えれば恐ろしくて、複数の相手をする故に感染している可能性がある為、固くなる物もならなかった事に起因する。

シユウが活動拠点にしているマイウスの街にある色街を通るときには、濃い化粧をした獣人や亜人のお姉さんがシユウを誘って来て何度誘惑に負けそうになった事か…。

その誘惑を撥ね付ける為、ギルドの依頼を我武者羅にこなしていた事が逆にシユウの首を絞める事になったのはなんと言う皮肉だろうか。

この世界を知るためギルドの長距離移動をする依頼を集中して選び

短期間で次々と達成していくシユウの名前が街に流れ始めると娼婦達の眼付が変わる事になる。

長距離移動する依頼の多くは日数が必要であり、命の危険が高い。盗賊や山賊、モンスター等に遭遇して死ぬ場合もあるし、事故にあつて死ぬ事もあるので報酬が高くなるのは当然だった。

それをシユウはいくつも同時に受け短期間で達成していたのだから金を持っていないわけがない。

懷を温めて欲しい娼婦達はシユウが通るたびに腕を引き、娼館に連れ込もうとする。しかし、シユウが頑なに拒み続けていた。

すると、「種なし」「たたないのかい?」「フニヤチン野郎」等を言われ、シユウは軽く凹んでたりする。

しかし、この世界に来てから数か月。

既に我慢も限界に近い。色々な意味で体が硬くなり始める。今なら鉄板でも打ち抜けそうな気さえしてきた。

(うおおおお…我慢だ。我慢！落ち着け俺…)

齒を食いしばり鼻息を荒くして耐える。

「うううううっ…」

すると、シユウの呻き声で腕の中にいたタマールが軽く身じろぎして目を開いてシユウと視線が重なる。

「ニヤッ！」

タマールは今の状況に驚きの声を上げるが、自分の脚に固い物がある事に顔を赤くして離れようとはしない。

「ぐ…ごめん。タマールさん直ぐに離れるから」

シユウがタマールから離れようと身を起こそうとした次の瞬間、理性という防壁を吹き飛ばそうとする言葉が紡がれる。

「…シユウさんが、したいならニヤーは良いニヤ…」

暗闇の中、頬を紅く染め上目遣いにシユウを見つめる目は潤んでおり、掴んでいるシャツに力が入る。

「いや…いやいやいや…タマールさん何を言ってるのよ」

動揺のあまりシユウはオネエ言葉になつてしまいが、タマールはシ

ユウから視線を外さない。

そして力強く自分の気持ちを語る。

「ニャーはシユウさんの事が好きニャ。ニャーが猫人族なのに、差別しないし丁寧に接してくれたニャ。ハッキリ好きだと思えたのはマイアスの街で助けてもらった時からだけど、この気持ちに嘘は無いニャ…。帝都に行くって言われた時は離れるのが嫌で着いて来ちゃったニャ…。シユウさんは、こんなニャーは嫌ニャ？迷惑ニャ？」
涙を浮かべシユウの胸に顔を埋めるタマールをシユウは無言で見つめる。

（タマールさん…それは俺が異世界から来た人間で、この世界の事を知らないからだよ…。それに差別は確かに俺の中にも存在しているよ…。ただ、それは俺がいた世界の問題なだけだ…）

「シユウさんは優しい人ニャ…。シユウさんに断られてもしようがニャイと思ってもいるニャ。だけど、ニャーに後悔は無いニャ」

「…。タマールさん…一つ話を聞いてもらってもいいですか？」

タマールは突然のシユウの言葉に断られるのかと思いきくと一度震え、恐る恐る顔を離してシユウの顔を見つめる。

「急にどうしたのニャ？やっぱ、ニャーみたいな獣人は嫌ニャ？」
シユウは上半身を起こし首を横に振る。

このまま黙ったままタマールを抱くのは簡単だ。だが、自分の気持ちを正直に伝えてきた女性にそんな不義を出来るほどシユウは器用ではなかった。

だから、シユウは自分の境遇を静かに語りだす。

「タマールさん…。俺の本当の名前は、小山修治っていうんだ。そして、俺はこの世界とは世界から来た人間なんだよ…」

「ニャ？別の世界ニャ？」

修治は頷きを一回。

「双子神の月天宮と陽天宮にこの世界に召喚されたんだ…。俺のいた世界には人間しかいなかった。だから、この世界の歴史を知らないし、獣人に対して偏見もないだけなんだよ」

「ッ。でも…でも、そんな関係ないニヤ！」

「双子神の力で不老の存在にされたのに？俺は、この世界に来た2日目に盗賊を4人殺しているし、ギルドの依頼でも襲ってきた盗賊を何十人も殺しているよ？そんな血にまみれた俺でもいいの？俺は老いる事も無い化け物みたいなもんだよ？」

タマールも上半身を起こし、シユウの正面に移動して右手をシユウの顔に力強く手を当てる。

「シユウさん…。いくら人を殺して血に塗れたってシユウさんが優しい事には無いニヤ。きっと歴史を知ってもシユウさんは大丈夫ニヤ。それに不老なんて羨ましいニヤよ？きっと、もし何十年後もシユウさん一緒にいたら老けたニヤーを見てシユウさんが幻滅しちゃうニヤ」

そう言つて笑うタマールを見つめ、無意識に涙を流しながら笑っている事にシユウは気が付いた。

（あれ…？何で泣いているんだ？）

タマールはシユウの頭を胸に抱く。

「ニヤーは今の話を聞いて、シユウさんがもつと好きになったニヤ。シユウさんが辛くて泣きたい時はニヤーが胸を貸すニヤ。だから、シユウさんがやりたい事をするニヤよ？」

そう言つてシユウの頭を優しく撫でるタマール。

（そっか…。この世界に来て初めて安心出来たのか…）

シユウは、平和な日本で生まれ映画や漫画等のフィクションの戦争しか知らない。

当たり前だが、本当の人を殺した事もない。この世界をゲーム世界の延長と考える事で人を殺す事、生き物を殺す事への忌避感を誤魔化し、不老という生物以外の何かになった事を忘れる事で精神の均等を保っていたのだ。

その枷が外れた反動で涙が出た事にシユウは気が付いた。そして、枷を外してくれたタマールに深い愛情を感じる。

（ああ…俺は救われたのかもしれない…）

だから、シユウはタマールへ想いを伝える。

この世界でも人は簡単に死んでしまう。伝えない事で後悔をしたくはなかった。

「タマールさん：俺もタマールさんが好きだ……。だから、お願いがあるんだけどいい？」

「ニヤ？」

「タマールさんを抱きたい！」

シユウの発言に撫でていた手が止まり、頷く気配。

「ニヤーは最初から良いって言ってるニヤ。恥ずかしいから、何度も言わせニヤいで欲しいのニヤ」

シユウはタマールの胸に顔を埋めたまま強く抱きしめ押し倒し、軽く悲鳴を上げたタマールの口を自らの唇で塞いで強く吸う。

最初、タマールは緊張から強張っていたがシユウの激しいが優しい愛を感じ緊張を解きシユウを受け入れた。

暗い部屋に二つの影が蠢き、夜は更けていった。

まだ薄暗い早朝にシユウは目が覚めた。

部屋の中は汗の臭いと体液の匂いが充満していたので窓を少し開け、換気をしながら水差しから水を飲み部屋のベッドの惨状を見て苦笑いする。

「やり過ぎたかな……」

乱れたベッドの上にはうつ伏せに倒れ、荒い息をして寝ているタマールが全裸で寝ていた。

まだ外の空気は少し冷たい。シユウは毛布をタマールにかけ、乱れた肩まである髪を優しく手で梳く。

「タマールさん、あなたの御蔭で救われましたよ……。彼方の気持ちを感じて幸せです」

優しく語り掛けた言葉に、寝ているタマールは軽く身じろぎしゴニ

ヨゴニヨと寝言を呟いている。

「ニヤーもニヤー」という言葉に苦笑を浮かべ、ベッドから離れると扉を静かに開けて廊下へ出る。

宿屋の朝は早いので、この時間でも階下では誰かしらいるだろう。汗を拭いたかったのでお湯を貰いたかったのだ。

シュウの予想通り、店主と何人かの制服を着た小姓が走り回っている。

店主はシュウを見つけると笑いながら近づいてきた。

「おはようございます。夕べは、遅くまでお楽しみでしたね」

この発言にシュウの顔は赤くなる。ベッドの中にいるタマールの声は大きくシュウも防音性は大丈夫なのか気にはしていたが、数か月に及ぶ禁欲生活はそんな不安を軽く凌駕していたので途中からは考えていなかった。

どうやら、聞かれていたらしい。

「ご安心を、お客様の部屋の左右二つの部屋は空いておりますので他のお客様へは聞かれていません」

（ちよつと待て…何でお前は知っている…）

シュウの当然の疑問を感じ取ったのだろう、店主は慌てた様子で両手を勢いよく何度も振った。

「身回りをした小姓の一人が、扉を通りかかった時に聞いたらしいのですよ。ハハハ」

乾いた笑い声を上げる店主を人睨みして黙らせ、降りてきた目的を言う。

「体を拭きたいので、桶にお湯を頂けますか？」

「少々お待ちください。今沸かしていますので沸いたらお部屋にお持ちしましょう」

「お願いします」

シュウは店主に、コインを何枚か渡し部屋へ戻る。

部屋に戻るとタマールは目を覚ましていたが、動けないのかベッド

の上から移動していなかった。

「タマールさんおはよう。大丈夫ですか？」

「ッ…おはようニャ。…ちょっと腰が痛くて動けそうにニャイかニャ…」

シウはコップに水を汲みベッドまで移動するとタマールの横に腰をおろした。

タマールを仰向けにし、背中に手を回して上半身を起こす。

「水だよ？飲める？」

「嬉しいのニャ。喉が渴いて苦しかったのニャー」

コップをタマールの口へ持って行き飲ませようとするが、タマールは首を横に振る。

「どうしたの？飲みたいんじゃないの？」

するとタマールは頬を紅く染め、か弱い声でシウの耳へ囁く。

シウの顔も紅くなるが、口に水を含みタマールの唇に近づける。

二人の唇が触れる瞬間

コンッ！コンッ！ガチャッ

「お湯をお持ちしましたー」

突然開かれるドアの前には、昨日部屋に案内してくれた小姓の少年がお湯の入った桶を持ち立ちつくしている。

「……………」

「えっ…しつ失礼しました」

暫く固まっていた少年は桶を其の場に置いて逃げるように部屋を出る。

バタンッと勢いよく締められたドアの音の音に続き、ドタドタと廊下を走る音が遠ざかる頃に止まった部屋の時間が流れます。

「ングッ…いや…ビクリしちゃったね…」

含んだ水を飲み込み、固まったままのタマールへ語りかける。

「ウウウウ… シュウさん以外の男に裸を見られちゃったニヤ…」

涙目になるタマールの頭を撫で、涙を拭いてあげる。

「タマールさんの身体は綺麗だから見られて恥ずかしい物じゃないよ。それに、触っていいのは俺だけだしね。まあ、次見たら怒るけど」

「ニヤツ・・・ングツ」

何か言おうとしたタマールの口へ、再度口に水を含んで塞ぐと、ンクツとタマールの喉が鳴り、そのまま舌を絡める。

少し苦しそうに暴れるタマールの体を強く抱きしめ抑えてから、第2回戦の幕が開けた。

若くなつた身体と数か月の禁欲生活は一晩で解消しきれず、昼前まで及んだ。

朝は人の通りも多く、流石に恥ずかしかったのだろうタマールも声を必死に押し殺していたが、その姿が可愛らしくシュウの嗜虐心を煽ってしまい更に激しくなる行為でタマールは途中で気絶してしまふ。

流石にやりすぎたと反省し、既に水になってしまったお湯を再度貰いに行つてお詫びとばかりにタマールの体を綺麗に拭いて身繕いをする。

タマールが目覚めるまで椅子に座り時間を潰しているとノックがされ入る様に言ったら洗濯婦だと名乗った狐耳の恰幅の良い女性が現れた。

荒れたベッドと失神したタマールを見た女性は実に良い笑顔を浮かべる。

「昨夜は激しかったのですねえ」という言葉にシュウは頭を掻いて苦笑するしかない。

（いや・・・実は朝もです）

そんな事を思っていると、ベッドメイキングするというので女性の

言葉に頷いたシュウはタマールを綺麗な布で包むと所謂お姫様抱っこをして椅子に腰を降ろした。

狐耳の女性の手早く汚れたシーツや毛布を回収し、ベッドを綺麗にしていく。

「終わりました。朝食をお出し出来る時間がもう少しで終わってしましますが、お部屋にお持ちいたしますか？」

「では、お願いします。それと、その桶も片づけてもらっていいでしょうか？」

女性は分かりましたと言い、一礼してから部屋を出て行く。

そんな後ろ姿を見送りドアが閉まった頃にシュウは声を出す。

「…タマールさん起きてますね？」

ビクッと腕の中にいるタマールが動く。

「何で寝ていたフリをしていたんです？ 恥ずかしかったですか？」

一度縦に頭が動き耳が紅く染まる。

（もう可愛い人ですね…。だから少し苛めなくなっちゃうんですよ）

シュウがタマールを抱き上げた時、タマールの瞼が何度か震え薄めになっているのをシュウは見逃さなかった。

「シュウさんは意地悪ニヤ…。昨夜、あれだけ激しかったのに朝もニヤんで…」

タマールは唇を尖らせて抗議し、シュウの腕から逃れると肌着と服を着て、その綺麗な体を隠す。

その姿を後ろからシュウは眺めていたわけだが、タマールは気にする事は無かった。

タマールが着替え終わると朝食を持ってきた犬耳の少年から朝食を受け取り部屋で二人向き合って朝食を取りながら今日の予定を話あう。

「王城からの使いはアンジェラさんが来るっていう話だったけど、時間がかかるとも言われてたから今日中に来る事もないと思うんだ。時間あるけど、タマールさんは行きたい場所とかある？」

スープを吸んだスプーンを咥えていたタマールは頷く。

「ニャーは一度ギルドに行って依頼の品を納めて来たいニャ。シユウさんのお陰で余裕はあるけど、早く届ければ報酬に上乘せもしてもらえるニャ」

「いいよ。それじゃあ、これを食べたらギルドに行こうか」

その後に行きたい場所を話し合いながら、他愛もない会話を楽しむ。シユウにとってその日の朝食は、この世界に来てから一番楽しい食事だった。

第2話（後書き）

お読み頂ありがとうございます。

今回は、男女の営みについて初めて書いてみました。

いや、難しいですね。前回の戦闘シーンも、頭を捻って考えましたが、今回も捻りに捻って絞り出しましたが、こんな内容になりました。

一応、誤字脱字な無いか確認して書いておりますが、作者の中学から高校の国語の成績は5段階の1と2で埋め尽くされております。作者が気がついていない間違いを教えて頂けると幸いです。

それでは、今回はここまでということと。

第3話（前書き）

いったい全体何が・・・。

総PV1400超、ユニーク200超

評価もしていただき。お気に入りも9人の方に入れてもらえているなんて感激です。

稚拙な文ですが、多くの方に読んで頂けて作者は泣きそうです。ありがとうございますm（――）m

今回もご都合主義になっております。

ここでお詫びを。

説明に建国しますと書いてありますが、作者の文才では、まだまだ道のりは長そうです。どうもすみませんm（――）m
例のごとく、誤字脱字が多々あつて読みにくい箇所があるかもしれません。

ご指摘頂けると、作者は土下座した後で修正させていただきます。

第3話

朝食後、タマールは訪ねて来る人がいたら拙いと思い直しシュウに宿屋に残る様に言ったが、伝言を宿屋に残してもらえば良いと説得し一緒に行くことを決めた。

宿屋の主人にギルドの場所を聞き、アンジェラが訪れた場合の対応を伝えておいたので問題は無いはずだ。

二人は帝都の中心を走る幅10メートル程の大通りを歩いている。

「帝都は人が多いニヤー……」

帝都の大通りは、確かに獣人や亜人が数多く見られシュウが拠点にしていたマイウスの街に比べて道も広い。しかし、シュウが修治として生きていた日本に比べると人も少ないし、道も狭い。

ここまで多種な人種（？）はいないが。

「そういえば、この国って大きいのですか？」

「ニヤニヤッ！ シュウさん、それ本気で言ってるニヤ？」

「もしかして常識でした？」

シュウの発言に、タマールは頷くと皺が寄った目頭を揉み、シュウが異世界から来た事を思い出すと「ニヤー……」と鳴く。

「シュウさん、この帝国の名前知ってるニヤ？」

「ローゼリア帝国でしょ？ 帝都の名前も同じローゼリア」

「そうニヤ。そのローゼリア帝国は、このアラギラ大陸で一番大きな国ニヤ。大陸の何割を支配しているか知っているかニヤ？」

この質問には首を横に振る。帝国以外にも国があるのを知っていたが、シュウが手に入れた地図は帝国の一部が書かれているのが殆どで精度も良くない。長距離の依頼を数多くこなしていたが、世界地図など何処でも見なかったし、2か月程では全ての地区を回ることなど不可能だった。

「そんなに、このローゼリア帝国って大きいのですか？」

だから、この質問はシュウにとって当然の物だった。しかし、タマール達の様にこの世界で暮らす人々には常識だったようだ。

タマールは出来の悪い生徒を叱るように腕を組んで指を一本立てシユウに振りながら答える。

「ローゼリア帝国は、大陸の4割を支配しているニヤ。属国も含めれば5割になると言われているニヤニヨ？」

「確かにそれは大きいですね……」

「ローゼリア帝国は属国に軍も常駐させてるし実質支配率は5割ニヤ。それは兵士の数も巨神兵の数も1番多いからと言われているニヤ」

「確かに数は力って言いますしね……」

シュウはタマールの答えに頷く事しかできない。嘘か本当かの区別も出来ないし、タマールが嘘をつくとは思っていない。

「ニヤーが生まれる前に帝国の支配から脱しようとした亜人の国が幾つか出たけど、殆どの国が滅ぼされたニヤ。生き残ったのは奴隷にされて売り飛ばされたりして、今は北の雪深い地域に逃げ延びた国々が同盟を組んで帝国の侵攻を止めているニヤ」

「んー…それってノール同盟の事？」

ノール同盟の事を知ったのはシュウが北の国境近くにある城砦都市ノスアギヘギルドの依頼品を届けた時だった。

ドワーフやエルフ等の亜人と多様な獣人の国で人間種と敵対しているらしく、ノスアギに着いて荷物を渡したギルド員に注意された。

「ノール同盟は帝国に比べて食糧の生産率も低いし国も狭いニヤ。小競り合いも多いって話を聞くけど、帝国相手になると団結して闘う強い国ニヤ」

「んー…帝国だと亜人の迫害があつて、同盟だと人間の迫害か……。何か嫌な世の中だね……」

「ニヤーもそう思うけど、これは仕方ないと思うニヤ。お互い殺し合いの戦争を何度もやってるニヤ」

「……」

シュウは、この発言に何も言う事はできなかった。
知らない事を語るつもりも無いし、その資格もないからだ。

この世界の事をまだまだ知らないシュウはタマールが以外と博識な事に驚き、他の事も教えてくれた。楽しい話ばかりではなかったが……。

帝国内の奴隷売買は合法で、奴隷から解放されるには1年ごとに更新する市民権を獲得しなければならないが払える額だった。しかし、人間種以外に発行される市民権の値段は、獣人や亜人が受け取る平均給与の半年分近くにもなり、殆どの者は奴隷になるしか無い。

タマールは宿の給仕以外でも冒険者としても働いているので何とか払えていると語った。

そして、冒険者になる力も無く、仕事もないが奴隷になりたく無い者は、市民権をもたない流民になるか違法な商売に手を出して犯罪者になるかの二通り。

そして、犯罪者は若く健康であれば奴隷として売られ、歳老いたり力の弱い子供は処刑されるという。

シュウは、その話を聞いて無意識に歯を食いしばり口の中に血の味を感じた。

ギルドの依頼で別の街へ行くと必ず奴隷市場が開かれているのを見かけた。そして、首輪をつけられた無気力な眼をする子供を見ると無力な自分を情けなく思った事を思い出したのだ。

フェニミストを気取るつもりは無いが、虫唾がはしりもした。

旅の途中で聞いた話の中には、領民の亜人も人間も区別なく扱う少数の貴族がいる中で、それ以上いる貴族の中には税が払えない領民を違法だろうが、合法だろうが関係無く奴隷として売って私腹を肥やす輩もいると噂に聞いているだけに遣る瀬無い気持ちになる。

シュウが普段暮らしているマイアスの街の領主は、前者であり奴隷市場は存在していない。獣人や亜人の迫害が他の街に比べて緩いのでタマールも安心して暮らしていると語っていた。

帝国では亜人や獣人に対する迫害がある事をシュウは知っている。だからこそ、迫害を受けるタマールを一人で出歩かせたくなかった。そして、シュウは長期間帝都にいる可能性もある。

「タマールさん、宿の外に出る時は絶対に俺を連れて行くこと！いいですか？」

だから、シュウはタマールへ釘をさす。

もし、タマールが殺されたり誘拐されたら犯人を絶対に許さないだろう。殺す為、シュウは帝都だろうが、何だろうが炎で包む覚悟があった。

「どうしたのニヤ？そんな怖い顔をしニヤくても大丈夫ニヤ。ニヤーは市民権を持っているニヤ」

「ですけど、心配です。もし、タマールさんに何かあったら……」心配した顔で見つめるシュウの顔を見たタマールは頬を染めシュウの腕を取って抱き締めると笑顔を浮かべる。

「じゃあ、シュウさんがニヤー守ってニヤッ」

「もちろんです！」

力強く頷いたシュウへタマールは苦笑する。その眼を嬉しそうに細められていた。

ギルドへ荷物を届けてから近くにあった店で昼食を取り露店を冷やかして宿へ戻るとシュウの予想を裏切って待っている人物がいると宿の主人が伝えてきた。

食堂で待っていると言うので行ってみると、耳が隠れる長さの紅い髪を持つ騎士アンジェラがいた。

前回会った時は、兜をかぶっており知らなかったが、天然の紅髪を見ると本当にファンタジーの世界だと改めて認識する。

「あー！すみません。どうやら、お待たせしたみたいですね……」

アンジェラの顔は怒っており、シュウを見つめる瞳は剣呑な光を放っている。

「別に待っていませんわ。さっき来たばかりですから。私が怒って

いるのは、陛下が呼びになるかもしれないのに、呑気に街へ出かけた事にです！」

「なるほど…。すみませんでした」

「私が悪いのニャ。ごめんなさいニャ…」

シユウ達が素直に謝った事で幾分か気持ちを落ち着かせたアンジェラは、食堂にある椅子へ座る様に促す。

シユウとタマルは大人しく椅子に座ると、アンジェラは一度咳払いをしてシユウへ来た目的を告げる。

「では話を進めます。まず、シユウ殿が持ってきた王殻亀の頭蓋骨が本物と判明しました。明日の朝、私と使いの者が迎えに来ますので一緒に登城してもらいます。申し訳ありませんが、呼ばれているのはシユウ殿だけですので、タマルさんには待っていただくという形になりますが、よろしいですか？」

（よろしいですか？…嫌だっけ？でも拒否権はないんだろ？なあ…）

シユウが隣にいるタマルへ視線を向けると、タマルは気にした素振りも見せず淡々と頷いている。

しかし、シユウには一つ問題がある。

「わかりました。ただ、私は田舎者ですので作法という物を知らないのですが大丈夫ですか…？」

シユウの意識、小山修治は一般人であり、中流家庭で育った身の上だ。上流階級の作法など習ったこともないし、昔にテレビでやっていたドキュメンタリー番組をチラ見した位だ。

ましてや、この世界の作法など知るはずもなかった。

だから、不安を口にしたのだがアンジェラはあっけらかんと口を開く。

「明日は陛下との謁見がありますが、クリフ団長も一緒に謁見室に入ります。クリフ団長の後ろを歩いて、同じ様にしてもらえば大丈夫です」

一国の主と会うのに、それで問題無いのかと疑問にも思うが、ここ

はアンジェラの言うとおりにした方が良さそうだとシュウは思った。下手に何か言って、嘘を教えられて無礼討ちなんて事態になっても洒落にならない。ただで殺されるつもりもないが…。

シュウはホウツと安堵の息を吐きアンジェラへ頭を下げる。

「わかりました。いろいろ教えて頂きありがとうございます」

「いえ…。では、私は帰りますね」

そう言って立ちあがったアンジェラは出口に歩きだす。

しかし、すぐ立ち止まりシュウへ向き直った。

「おそらく、シュウ殿が皇殻亀をどのようにして倒したか聞かれると思いますので考えを纏めておいた方がいいですよ？」

そう言ってアンジェラは今度こそ宿屋を出て言った。

「シュウさん、どうするのニヤ？正直に全部話すのニヤ？」

部屋に戻り椅子に座ったシュウへタマールは心配そうに声をかける。

だが、当のシュウはノンビリとお茶を飲んでた。

「シュウさん聞いているニヤ！？ニヤーは心配してるニヤよ！」

「大丈夫ですよ。王殻亀を倒した事は事実ですし、心配いりません」
タマールは未だ納得していないのか、頬を膨らませてシュウを見つめる。

シュウは、まるで子供の様なタマールへ苦笑し内緒話をする様に耳へ口を近づけた。

「実はですね」

翌日、シュウが食堂で食後のお茶を飲んでると昨日言ったとおりアンジェラが迎えにきた。

今日の服装は鎧では無く、黒い軍服の様な物を着ている。

「おはようございます。アンジェラさんも何か食べますか？」

シュウが空いている席を指すとアンジェラは首を横に振った。

「朝食は済ませてあります。出発の時間があるので大丈夫ですが、余り遅くなっても問題があるかもしれませんので、急いでもらえる

と助かります」

「わかりました。では、着替えてくるのでお茶でも飲んで待っていてください。すぐに戻ります」

タマールは食事を終えていないのでシユウは一人で部屋に戻る。

そして、戻ってきたシユウを見た二人は呆気にとられる事になった。しかし、シユウは気にせず元の椅子に座ると新しく淹れたお茶を啜る。

「二人ともどうかしました？」

「……」

「ふむ…何か変な物でも見た顔してますよ？」

そう言ってお茶を堪能していると、シユウの視界にいる二人の女性は揃って頷いていた。

タマールへ別れを告げ、宿の外に出ると白塗りの馬車が待っていた。2頭引きの大きな馬車の中は広く、上質なクッションが使われたシートは程良い反発があり長時間乗っていてもお尻が痛くならない配慮がされている。

そして、その中にシユウとアンジェラは向かい合って座っていた。

御者が馬車を出し、軽い震動を感じるとガラガラと車輪が回る音と窓から見える街の景色が流れ始める。

シユウが滞在する『獅子の尻尾』という宿屋から王城まで歩いて30分程。

窓から流れる景色の早さから、王城まで大体15分とシユウは検討を付けた。

しかし、広いと言っても密室に女性と二人。

沈黙の空気は重く、息苦しい。何を話せばいいのかシユウは考えるが、特に何も思い浮かばない。まさか「御趣味は？」とお見合いの様な事を言えば良いのかと混乱し始めると天の助けとばかりにアンジェラが話かけてきた。

「その…シユウ殿の服装は見たこと無い物だが、故国の物なのか？」

「まあ、故郷の礼服ではありません」

今のシユウを見たら、誰もが結婚式か成人式にでも行くのかと思うことだろう。

所謂、紋付袴を着ているのだから仕方ない。

これはGUNZ OF PATRIOTのイベントアイテムで正月に無料配布されたネタアイテムだった。

中世ヨーロッパの街で日本の着物は違和感を丸出しにするが、一国の王と会うのだから礼服を着た方が良いと判断した結果選んだのがアンジェラの反応は余り良くなさそうだ。

(んー…これしか無いしなあ…)

シユウが持つている装備に礼服として使える軍服や服はある。だが、素材が防弾防刃防魔と三拍子全て備えており、服というより鎧のような性能になっている。そして、見た目がこの世界の服装とは掛け離れているので諦め、現実の日本でもある素材を使っている着物にしたのだが、どうやら失敗だったようだ。

「やっぱり、変でした？」

シユウが恐る恐る聞くと、アンジェラは首を何度か振り慌てた様子で語る。

「いえ…、変と言うより初めて見る服装だったのでね驚いただけですよ？良く見ると生地も上等なのを使っているみたいですし、さぞかし高い物なんでしょうね。アハハハ…」

そう言つて目を逸らすアンジェラにシユウは軽く凹むが、後日シユウが着ている着物を見た帝室御用達の布商店の主人が、見事な絹布と刺繍に感心し、シユウの元へ訪れると幾らでもいいから売ってくれとお願いに来る事になるが、割愛する。

馬車はシユウが凹んだ以外、特に問題も無く城門を潜り、広い中庭を通り過ぎると8メートルを超える白い石柱が何本も並んで立つ玄関の前に止まった。

馬車の扉が外から開けられ目的地に着いたと告げる。

「では、行きましょう」

アンジェラに促され馬車から下りると入口の両脇に何人ものメイドと深い皺が顔に刻まれた姿勢が良すぎる執事が出迎えて一礼する。執事の老人は、シユウの足先から頭の先を品定めするかのように見た後口を開いた。

「お待ちしておりました。こちらが、王殻亀を倒したと言われるシユウ様ですか？」

「そうだ。陛下の御命令でお連れした」

「左様でございますか。では、私もが御案内いたします。シユウ様、どうぞこちらへ」

シユウは言われた案内に従おうと思い前に出ようとするが、隣に立っていたアンジェラが鋭い目つきでシユウの腕を掴み引きとめた。

「いや、陛下とお会いになる時間はまだあるし、謁見の前にクリフ団長との約束があるのでシユウ殿は私が御案内するので結構だ」

アンジェラの口調には隠しような無い険が潜んでいるのを感じた。
（んー…なんかキナ臭いなあ…。よくある宮廷争いでもあるのかも？）

昨日タマールから聞いた話では、現ローゼリア帝国皇帝ユリアヌス・ヴィ・ローゼリアには、子供は正室との間に授かった3人の娘と、側室の間に授かった2人の息子がいると教えてもらっていた。

昔の地球でも王女は他国の王族か自国の有力貴族へ嫁ぐ事で縁を深める政略結婚の道具だし、他国の王族を婿に取るより側室の息子を皇太子に据えた方が国内の貴族には良いだろう。

側室の子供が駄目だと言うなら国内の有力貴族の子弟が王女と結ばれる可能性もあるし、選ばれた家は一生安泰になる。

もし本当に宮廷争いがあるとしたら、そこら辺の争いだと言簡単に想像がついた。

ただ、王子王女の仲は良いとも聞いているので実際の処は謎だ。案外、王子王女の後ろにいる貴族達が勝手に争っているのかもしれない。

ただ、シュウはそこまで考えても自分には関係の無い事だと思わない。

シュウは、この帝国の民では無いし、王殻亀を倒したのは自分のやりたい事をするのに丁度よかっただけだ。

アンジェラに付いて行こうが、執事に付いて行こうが、どちらでも構わないし、こんな事に巻きこまないで欲しいというのが本音だった。

「あの…、私はどうすればいいのでしょうか…？」

シュウが睨み合っている二人へ声をかけると執事が声を発する前に腕を掴んでいたアンジェラに引っ張られた。

「こつちだ。時間が無くなってしまう！」

そして、シュウは腕をグイグイと引っ張られ城の中へ連れていかれた。

「アンジェラさん、破けちゃうから。意外と着物って弱いからー！」

シュウの叫びはアンジェラに届かず、目的地まで離してもらえず、イベントアイテムの着物は意外と丈夫だった事が証明された。

城の中にある騎士団の詰め所、その中にある個室の前にシュウは案内された。

個室の扉をアンジェラがノックし、「入れ」と声を掛けられた後に扉を開けてシュウの腕を引っ張って無理矢理押し込む。アンジェラは外で待機するようだった。

たたらを踏んで部屋に入ったシュウへ待ちかねた様にすぐ声がかかる。

「御苦労さん。アンジェラが無理をしたようだね」

シュウが大勢を直して部屋の中を見ると声をかけてきた人物が視界に入る。部屋の奥にある書類が積まれた机にいるのは帝国騎士団団長のクリフだった。

「改めて名乗ろうか、帝国騎士団団長クリフ・ローゼンだ」

「ご丁寧にもありがとうございます。ご存じですが、私も

改めて名乗ります。マイアスの街で冒険者をしているシュウです。苗字はありません」

クリフは立ち上がりシュウの前に移動する。そして、シュウの服装を見て何か得心したのか一度頷いた。

「まあ、座ってくれ。時間は余り無いが少し話をしたい」

部屋の隅にあるソファアの出口側へシュウが座り、クリフが対面へと座る。

すると扉が開き、アンジェラが湯気の昇るお茶をトレーに乗せて持ってきた。

「どうぞ、イスル産の紅茶です」

シュウとクリフの前にお茶を置き、クリフの後ろへ待機するアンジェラ。

「ありがとうございます。イスル産とは高級茶葉ですね」

「ああ、向こうに伝手があるので取り寄せたんだ」

クリフは自慢するでも無く、淡々と言葉を紡ぐ。

イスルは西にある帝国の属国で大陸一と言われている紅茶の名産地でもある。イスル産の茶葉は1番安くとも普通の2倍の値段がするが人気が高い事で知られていた。

シュウもよく紅茶を飲んでいるので、地名は知っていたが流通が少なく手に入れた事は無かった。

そんな高級茶を伝手で手に入れ、一介の冒険者であるシュウに振る舞うクリフは帝国騎士団団長という要素以外でも唯者では無いと言えたし、紅茶を飲む姿が洗礼されており、何と無く華がある様に感じた。

「あー…美味しいですねえ。お茶だけでは無くて淹れ方もいいんでしょうね」

一口飲んだだけでも豊潤な香りと旨味、そして程良い苦味が舌に生まれる。

これだけの味を出すのには茶葉だけでは無く、淹れ方にコツがあると思った。

しかし、この紅茶の味からシュウは城に着いてから新たな懸念が生まれる事になる。

（これだけ高い御茶出して接待しているんだから、絶対何かあるよね…）

神経質すぎると自分でも思うが、権謀術数渦巻くという言葉われる宮廷で油断しても良い事はないだろう。事実、城に着いて即刻行われたアンジェラと執事の遣り取りを思い出しシュウは内心で溜め息をついた。

そんな事を少しも出さないシュウのお茶に対する感想にクリフは齒を見せて笑う。

「これが分かるという事は、相当飲んでいるな。この紅茶はアンジェラが淹れたんだ。こいつの淹れる茶は美味くてな。つい頼んでしまっんだ」

アンジェラが頬を薄ら染めて、シュウを睨みつけるが、シュウには意味が分からない。褒められているのに何故！と思う。

そして、シュウを見るクリフの顔は、ただ単にお茶を楽しんでいる様に見える。

（んー…考え過ぎたか？何も裏はありそうにないけど…。しかし、アンジェラさん…何で俺をそんな目で睨みますか…。怖いですよ…！）

女性の睨みとは幾つになっても怖いと感じるシュウは背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

居心地悪そうに身体を揺すると、それを待っていたかのようにクリフは本心を語り出した。

「シュウ殿、貴殿に頼みがある！」

いきなりテーブルに両手を着き身を乗り出してきたクリフに油断してたシュウは思わず後ずさる。

そんなシュウに頓着せず、クリフの言葉は続く。

「王殻亀を倒した貴殿を、是非とも騎士団へ迎えたい。何も何時どこで死ぬかもわからないその日暮らしの冒険者より騎士団で名誉を

得たいと思わないか？」

どうか頼むと頭を下げるクリフの行き成りの行動にシュウは思わず頷こうとしてしまったが、慌てて気持ちの立て直しを図る。

（うわ… やっぱ、裏があつたよ…。 しかも、騎士団へのスカウトだし…。 それに何時死ぬか分からないって戦争起きれば騎士団って一番最初に死に行くんだから、冒険者以上に死ぬ可能性高いんじゃないの？）

何と言って断ろうか迷うシュウがアンジェラを見ると、アンジェラはクリフの突発的な行動に目を丸くして固まっていた。

（うわぁ… あの様子から察するとよっぽど珍しいんだろうな今の状況って…）

クリフの行動は、この世界にいる冒険者や騎士志望の若者には絶大な効果があるだろう、だがシュウには無駄としか言えない。

王殻亀を倒した報酬に東アルマダの領地をもらうからだ。その経営を他人に任せようとは思わないし、何より騎士や名誉に興味がない。だから、当然の言葉をクリフに伝える。どんなに頼まれても、頷くつもりは無かった。

「申し出はありがたいですが、私は騎士になるつもりはありませんよ。王殻亀を倒した事で頂ける東アルマダの領地経営もありますし、何よりまだ領民もいません。これから領民を得るために領地を開墾する領主が騎士になつて領地の経営を疎かにすれば領民は集まらないでしょうし、それが他の騎士の方や、領民として集まってくれた者達に認められると思いますか？」

クリフはシュウの返事に一瞬顔を赤くしたがシュウの言い分も尤もだと思ったのだろう、一度息を大きく吐いてソファアに座りなおした。

「すみません。私的な事が理由で御断りして」

クリフは首を横に振り紅茶で舌を湿らせる。

「いや、私が拙速過ぎた。確かにシュウ殿の言うとおりだ。これから貴殿は戦うより辛い戦場へ出ると言うのに…。 すまなかった忘れ

てくれ」

この会話を最後に、この部屋の言葉は終わる。

アンジェラはクリフの申し出を断ったシユウを仇の様な眼で見つめるし、クリフは王殻亀を倒したシユウの勧誘に失敗した。

(どうしろって言うのさ・・・)

そんなシユウの心の叫びは、当たり前だが誰にも届かない。

ローゼリア帝国の帝都ローゼリアにある帝城には、大小様々な謁見の間がある。

シユウがクリフとアンジェラに連れてこられた謁見の間は、その中でも最大級の広さと格式を誇る真竜の間と言われる場所だった。

4メートルを超える扉の前には金縁され白銀に輝く鎧を着た近衛兵がハルバードを持って立っている。

シユウ達が扉の前に辿り着くと、典令官が名乗りを上げ扉が開かれた。

謁見の間の床と壁は大理石で覆われ、壁には何枚もの絵や旗が掲げられて彩りを添えている。

天井には、一匹の巨大な白い竜が描かれており、ローゼリア帝国の紋章を護っている。

広間には、左に礼服を着た文官。右側に鎧や軍服を着た武官が立ち、壁際には近衛兵が警護に立っていた。

クリフが謁見の間の中央に敷かれた真紅の絨毯の上を進み、シユウとアンジェラはその後ろに続く。

一番奥の高くなった台座の上には、金剛石やルビー、翡翠等の宝石が散りばめられた玉座が中央にあり、その両隣りに玉座と比べると控えめに装飾された椅子がある。

玉座から一段低くなった場所には、かつて城の前でシユウを見下していた宰相のナイゼルが視線を鋭くしてシユウを睨んでいた。

そんな視線を無視してクリフの後を歩いていると台座の4メートル程手前で止まり、片膝を着いて頭を垂れて臣下の礼を取ったので、

シュウとアンジェラも同じ様に傳く。

この場にいる文官・武官共に、見なれない衣装に身を包むシュウを見ると囁く様に近くの者と話し始めるが人数が100人以上いる部屋の喧噪は囁き声だとしても大きな音になる。

シュウにはハッキリと聞こえないが断片的に「あれが」「まさか」「王殻亀」という言葉が聞こえてきた。

シュウはまるで客寄せパンダになった様な気がして面白くないが、ここで暴れる程馬鹿でもない。

そのまま数分の時間が過ぎると広間に何の楽器かわからないが、ラッパを吹いた様な音楽が高らかに鳴り響き広間の喧噪は嘘の様に一気に沈静化した。

皆一様に頭を垂れて皇帝の入室を待っていると典令官が高らかに帝国皇帝ユリアヌス・ヴィ・ローゼリアの入室を宣言する。

静まり返った広間に聞こえるのは、足音と布が床に引きずられる音のみ。

息遣いさえ聞こえない静寂が広間を支配する。

「面を上げよ」

ユリアヌスの重いが威厳のある声が沈黙を破り、一斉に衣擦れの音が続く。

ユリアヌスは、中央で傳く騎士を見て口を開く。

「久しいな、クリフ」

「ハッ。陛下に置かれましては、ご機嫌麗しく、この度の拝謁恐悦至極にございます」

クリフは再度、頭を垂れ忠誠を使う皇帝に騎士の礼を尽くす。

満足げに頷いた皇帝は、その後ろにいる見慣れぬ衣装を着たシュウへ視線を向けた。

「そなたが、王殻亀を倒したという冒険者か？名は何と言うのだ？言うが良い」

「はい。シュウと申します。田舎育ちの市井の者故苗字はありません」

シウは床を見つめたまま口を開いた。面を上げよと言われても、それは貴族だけなのか、それとも全員に言った発言なのか判断しなかったからだ。

発言の許可は貰えたので素直に言うが、権力者故なのかユリアヌスの言い方はシウの琴線に触れてくる。

「ふむ…。市井の者が随分と珍しい服を着ているでないか。お前は何処の国の者なのだ？」

（別の世界からですよ）

そんな事を思いながら、クリフ達に言った事をそのまま伝える。

「東にある小さな国です。随分前に滅びた小国なので言ってもわからないと思います・・・」

シウの発言に皇帝のすぐ近くにいるナイゼルが一步を踏み出し、シウを糾弾するように指さす。

「無礼者が！陛下が聞いておられるのだ、正直に申せ！」

（正直に言えと言つてもねえ……。この世界には存在しないよ？）
シウは内心焦ったが、そんなナイゼルを止めたのはユリアヌス本人だった。

「良い。市井の者故礼儀を知らなかったのだろう。許してやれ」

「しかし、陛下…」

「良いと言っている！」

ナイゼル本人は、このままシウを責めて何としても追い出したいしかし、国主である皇帝が許したのだ。帝国NO.2の権力を誇る宰相のナイゼルにもその発言を覆す事は出来ない。

「失礼いたしました…」

不承不承と下がるナイゼルを横目に睨んで下がらせたユリアヌスは、シウへ皇殻亀と戦った経緯を訪ねて来た。

（遂に来ましたね…。じゃあ、やりますか）

「わかりました。お話いたします」

（タマールさんへ説明した、事実とは違いますけどね）

シユウは語る。

森に入ってから戦闘から、王殻亀に食べられて気を失った所までを虚実を入り混ぜて一気に休み無く。

銃で倒した事を魔法に置き換え、倒した魔物の数も大分減らし、王殻亀に食べられた時の魔導機兵の欠損も無くして話したが、大凡事実と同じだ。巨神兵については、森の近くで捨てられていた巨神兵を直して使ったと少し無理があつたかもしれないが、生身で王殻亀は倒せない事を知っている武官達は何も言ってこなかった。

（タマルさんにもアドバイスして貰って、捨てられた巨神兵拾って使うのは違法じゃないと知ってるし。ただ、捨てられた巨神兵の回収率は高くて、よっぽど運がなけりゃ見つからないって言われたけど…）

「という訳で王殻亀に食べられてしまいました」

シユウの説明に謁見の間は静まり返る、王殻亀の他にも事実より減らしはしたが多数の凶暴なモンスターを倒しているのだから誰も何も言えないのは仕方がない。

単機で倒せる様な数でもモンスターでもないから、最初は「嘘を言うな」「デマだ」と呟いていた武官も理路整然としたシユウの説明を聞くにつれて黙り込む。

「王殻亀の体内に入った時は死んだと思いましたが、運良く生き延びられました。そして、暗い周囲を見ると、木材があつたので私はそれに火を付けて明かりにすると剣を片手に持つて暴れました。すると苦しんだ王殻亀が私を吐きだそうとしたので吐き出される途中で剣を突き立てて耐えていたんです。それが偶々、貫いた場所が急所だつたらしく王殻亀を倒せたというのが本当の話で、言うのが恥ずかしかったので他の方に聞かれた時には黙っていました…」

シユウは苦笑を浮かべ恥ずかしそうに俯いて頭を掻く。

もちろん演技だが、見抜ける者は殆どいないだろう。見抜けたとしても倒したのは事実だから何を言ってもこようが関係ない。

『偶然倒せた運が良い奴』という評価があればシユウは十分だ。まだ十分な力を持っていないシユウは、帝国に警戒されるわけにはいかない。

誰もが呻き、何も言わない中でユリアヌスだけが疑問を口にした。

「我には分からぬのだが…」

ユリアヌスの疑問に、シユウは一瞬冷や汗を出したが、続けて発せられた言葉に安堵する。

「どうやって王殻亀の頸を落としたのだ？あ奴の皮膚は剣を通さぬぞ」

シユウはホツとして、答えを出す。この答えに予想していたし噓は殆ど要らないからだ。

「王殻亀の皮膚は外側からですと剣を通さない程硬いですが、内側だと不思議ですが容易に切り裂けます。骨は頸椎の繋ぎ目に力を込めて切断しました。ただ、大きかったので少し時間がかかり別のモンスターに襲われないかと冷や冷やしましたが…」

実際に近接装備を持つ魔導機兵を新たに出して切断しようとしたが、中々切れず過去に作った魔導機兵用のネタ武器でジェイソンと名付けたチェーンソウを使って切断した。

切断し終わった後に、運ぶため小さくしようと腕を振り上げた際、間違えて内側から刃を入れてしまった結果、簡単に切れた事に気が付いて少し凹んだのは内緒だ。

そして、多数のモンスターを屠っていた為、邪魔は入らなかった。

「その後、切断した王殻亀の首を何とか巨神兵に持たせて森を抜けました。無理をさせすぎた巨神兵は壊れて使い物にならなくなってしまうましたが…」

「フム…。嘘の様には聞こえないが、本当の事とも思えん。だが、王殻亀を倒したのは事実だな。良いだろう、北アルマダにあるノワールの土地をお前に与える。爵位は男爵だ」

「ハイ。ありがとうございま…す？」

（あれ…今北って言った？ノワールってどこ？）

ユリアヌスが立ち上がり、剣を鞘から抜き放ち爵位を授与の準備が始まる。

聞き間違いかとシユウが首を傾げて考えていると、クリフが急いで口を開いた。

「陛下に申し上げたき事があります」

本来許しもなく皇帝に発言すれば、極刑物の罪だ。だが、クリフはユリアヌスの覚えがいいのか、特に気分を害する事も無かった。

「なんだ？」

「王殻亀を倒した者には、北アルマダでは無く、東アルマダの土地が与えられるはずです。それに北アルマダは一年の半が雪に閉ざされ、敵国との国境近くにあるはずです」

「フム…」とユリアヌスは呟き、下にいるナイゼルへ尋ねた。

「本当かナイゼル？」

ナイゼルはユリアヌスへ一礼すると一枚の羊皮紙を取り出して確認する様に覗きこむ。そして、弾む声で告げる。

「過去の布告ではクリフ騎士団長の申しした通りでございます。ただ、2年前に再布告した際に王殻亀を倒す程の兵を国内に置かず、国境近くの領主へ据える事で帝国の守り手にすると決められており、陛下の裁可も頂いております」

今ここに誰もいなければ、きっとナイゼルは笑い転げているだろう。ニヤける顔を必死に羊皮紙で隠そうとしていた。

事実を言えば、ここにいる1人以外全員が変更された事を知りはない。

ナイゼルは宰相という立場を利用して、シユウが皇殻亀の頭蓋骨を持って来た日に捏造したのだから当たり前だった。

なぜそんな事が可能だったのか。それは、数多くの重要案件を片付ける皇帝は多忙で、皇帝の裁可が要らない案件は宰相のナイゼルが処理をしていたからだ。

王殻亀が倒される事は無いだろうというのが、帝国の認識であり重要度も低かった。

運が悪かったと言えば、それまでだが、今回は運が悪すぎた。

「そんな馬鹿な……！」

クリフは信じられないと首を振る。帝国を守るのが騎士団の務めだ。クリフも当然帝国の法を知っているし、モンスターに関する裁可は必ず目を通してしている。

それゆえ、今回のナイゼルの言葉に疑問を覚え疑ったのだ。

「おや？帝国の法に決められた裁決に騎士団長が逆らうのですか？」しかし、ナイゼルにそう言われてしまえば法を守る騎士には何もできない。認めたくなくても皇帝の裁可が出た命令は絶対だ。

それゆえ、悔しさから強く食いしばった歯茎からは血が流れ、握った掌には爪が食い込んで血で汚れている。ナイゼルを殺気で殺すと言わんばかりに睨みつけていた。

しかし、嵌められた本人。シュウはクリフ程口惜しがってはいなかった。

（あー……やられたか……。確かに良い土地だし話がウマすぎると思っただんだよねあ）

そんな程度だ。シュウはノワールという土地を知らないし、クリフが言った1年の半分が雪に閉ざされると言われても何とかなると考えている。1年中雪に閉ざされた土地でも人は生きていけるし、痩せた土地でも育つ食物もある。

そして、敵国へ近ければ、その食物を餌に水面下で交渉しても良いという考えさえ持っていた。

だから、シュウはハツキリと答えた。

「北アルマダのノワール領主を拝命します」

広間に響くシュウの声。

クリフはシュウの答えに信じられないと首を振り、ナイゼルも罠に嵌めたはずのシュウが何も感じていない事に呆気にと取られていた。

「良く言った。帝国の守り手としてよろしく頼むぞ！」

ユリアヌスは、そう言つとシュウへ歩みよりシュウの肩に剣の腹を置く。

本来は、授与者が皇帝の前まで行くのだが今回は真逆になった。

驚きの声が謁見の間に生まれるが、ユリアヌスとシユウは聞こえていないかのように儀式を続ける。

「汝、シユウ・ノワールは、ローゼリア帝国に忠誠を誓い王国の守り手になる事を誓うか？」

（最初から罫に嵌めるような国に誓えると思うか？）

「誓います」

心で本音を言っ、口で嘘を言う。忠誠心の欠片も無い宣誓をして儀式は終わり、シユウは帝国貴族になった。

後にシユウと親しかった者の子孫は歴史家達に語った。

「あの日程、貴族になる事が馬鹿らしく、下らないと思った事はない」

シユウが、そう言っ笑うと帝国貴族の証であるメダルを海に捨てた…。

第3話（後書き）

1話から読んでみると、主人公最強物なのに結構主人公やられてね？とか、思ってしまう作者でした・・・。

次は領地経営に挑戦になる予定です。

最初の計画では戦闘シーンが結構多い作品にしようと思ってたんだけどなあ・・・。

第4話（前書き）

お気に入り件数が28件も・・・。

いったい何があっただんでしょうか・・・。

ありがとうございます。作者は感無量です。

さて今回は、少し残酷な表現と初めて主人公以外の視点でも少し書いてみました。

またgdgdで何が言いたいのか、はっきり伝わらない場面があると思いますが、ご容赦ください。

お読み頂、ありがとうございますm(_____)m

第4話

ローゼリア帝国皇帝ユリアヌス・ヴィ・ローゼリアと謁見し、帝国貴族になって13日後シユウ改め、シユウ・ノワールは帝城の財務管理をする部署の個室で書類と向き合っていた。

「思ったより酷い内容だねえ……」

シユウが呟いて見ている書類は、与えられた北アルマダにあるノワール領の地図と管理収支表、戦力分布図等の各種書類だった。

領民は100人程でシユウの屋敷がある街は50人ちよつとで町では無く村と言うしかない。土地面積約900平方キロメートルと、領民の数と面積の割合が著しくアンバランスだった。

しかし、山が多く開墾したとしても広い畑は作れない悪条件。

攻められた場合、守り易い立地ではあるが厳しい気候の為、食料自給率も低く、敵対している隣国ナイナック王国との国境まで、直線距離で50キロと離れていない事がこのアンバランスを生んでいるとシユウにはすぐ理解できる。過酷な環境に加え大凡4年毎にオリンピックが来るような感じで戦火に見舞われ、財産の大半を失うか死ぬ可能性に出会うのだ。誰も好き好んで住もうとは思わない。ならば、こちらから攻めれば良いと簡単に決める事も無理だった。ナイナック王国は、ノール同盟の所属国だった。

もし、攻撃をしたらノール同盟に加入している多数の国家がノワール領へ総攻撃してくる可能性があるので軽率な行動はとれない。しかし、簡単に攻撃出来ないと言うのはナイナック王国にも言える。ナイナック王国が単身攻め込めば、ローゼリア帝国の総力で叩きつぶされるからだ。

よって、戦争の間隔が大凡4年というのはノワール領対ナイナック王国という形での戦争では無い。

帝国対同盟という互いの自国防衛戦力以外を集結して戦った後に設けられる戦力の回復期間であり、正確な日数ではない。軍備が早く

回復した方が、相手側へ攻め込むのだ。早くなる時もある、遅くなる時もある。ここ10年程は国境線の近くで一進一退の攻防を繰り広げており戦火はノワールに殆ど来ていないのがシユウにはありがたかった。

しかし、ノワール領国境付近にある砦の事が書かれている書類を読むシユウの顔は優れない。

「今は帝国騎士団が出張ってるから安心ですけど、宰相と貴族を見る限り期待するだけ無駄でしょうね…」

シユウが自ら望んで得た『運よく王殻亀を倒して貴族になれた』という評価は、帝国貴族内での風当たりを強くした。

運も実力の内と言う言葉はあるが、例え厳しく殆ど収入の見込みない土地だろうと運で領地を得た事に嫉妬しない者は少ないだろう。

それはこの世界にも当てはまる事だった。

最悪、宰相や貴族たちは、シユウを殺す為にノワール領の国境砦に詰めている騎士団を撤退させ、ノール同盟の攻撃を誘う位の事は平気でやるだろうと思う。

何故か？

それは、謁見が終わった日から数えてシユウへ既に10人以上の暗殺者が送り込まれているからだ。執拗に暗殺者を送る誰かは何かあってもシユウを殺すつもりだ。シユウが領地へ行ったら後で何かしらの理由を付けて騎士団を撤退させる事は想像に難くない。

「終わったわ」

騎士団が撤退した場合の戦略を考え続けるシユウの後ろに、物音一つせず頭の先まで真っ黒な衣装で身を包んだ影の様な人物が突如現れくぐもった声を発する。

唯一肌が見えるのは目元だけで、褐色の肌と紅い瞳が覗き見えるだけだった。

「おかえりなさい、リュカさん。今日はどうでした？」

シユウが視線を向けると、頭に巻いていた頭巾を取り外し素顔を晒

す。

銀色の髪を頭の上で結い上げた、美しいが冷たい印象を与える見た目20代後半のダークエルフの女性だった。

「タマルさんの周囲にいた邪魔者は全て排除しました。ご命令通り全て首を切って依頼主の元へ送っております」

淡々と報告するダークエルフは自分がどれだけ、恐ろしい事をしているのかを理解しているのだろうかと思っただけ、しかし、それを命令したのは自分だ。だから、ただ頷き言うべき事を言う。

「そうですか御苦労さまです」

リュカは労いの言葉を受けると、軽く一礼するし、壁際に移動して目を閉じる。

シウウの視線はリュカを追いかけて、何度目かになる疑問を口にした。「しかし、何度見ても信じられませんね…その美しさで250歳を超えているのですから。本当に250年以上生きているんですか？」

「妖精種は長命ですから…」

目を閉じたまま淡々と語る御歳264歳超の本名リュカ・テドロは完結答える。

せめて、目を開けて話して欲しいと思うが、リュカへ行った仕打ちを思い出すと無理もないと思った。

「まだ拷問した事を怒っているのですか？」

シウウはリュカとの出会いを思い出す。

皇帝との謁見が終わった帰り道、警戒スキルの警報によって尾行に気が付いたシウウは送ってもらった宿に入らず帝都の裏通りにある人ごみの無い倉庫へ入った。

「ずいぶん早いお客様ですね。まだ何もしていませんよ？」

背後の暗闇に向かって話かけるシウウの姿は、事情を知らない人が見たら酔っ払いにしか見えなかっただろう。そして、暗闇からの返事は投擲された2本の刃渡り20センチ以上ある大型のナイフ。

「……ッ！」

しかし、ナイフを投げた本人は驚き一瞬固まる。

見たことも無い衣装に身を包んでいる標的は長い裾と袖を持ち、動きにくそうに見える。その広い袖が風を伴って大きく動いたと思ったら、必殺の威力を込めて投げたナイフをいとも簡単に無力化されたのだ。これで驚かない方がどうかしていた。

反対にナイフを受け止めたシュウは反対に緊張もせず、淡々としていた。尾行者に気が付いてから身体強化の魔法をかけ、スキルを使う準備をしていたシュウにとっては、止まっているのと同じだからだ。

スキルをカンストしているシュウの身体強化の魔法は動体視力、反射神経さえ向上させ、始近距離で放たれた矢でさえ容易に掴む事が出来る。

投擲されたナイフなど、その速度に比べるまでもない。

その神業とも言える技を行ったシュウは淡々と感情の籠らない声で語りかける。

「誰の差し金ですか？大人しく教えてもらえると助かるのですが」ナイフの飛んできた方向へ向き直り、何も纏っていない視線は暗闇の中にいる暗殺者へ間違いない向けられていた。

暗殺者は固まっていた自分へ軽く舌打ちすると、新たなナイフを抜いて低い姿勢を保ったまま素早く走り出す。シュウが「ホウツ」と小さく呟く程素早く移動し、スピードと体重を乗せたナイフを鳩尾へ挟る様に突き出してきた。

「ウツ！」

だが、暗殺者は再度驚く事になった。突き出したナイフは間違いなくシュウの鳩尾を付き刺し内臓を挟むと思ったが、刺さる瞬間に光の壁が出現しナイフを弾き飛ばしたのだ。

スピードと体重を乗せた重い一撃は壁に遮られた瞬間、その反動をナイフを握っていた腕の手首へかける。

軽いポキッという音が小さく鳴り痛みに顔を顰めるが、攻撃に失敗し標的から離れようとする本能は無意識の内に身体を動かした。

「グハッ……」

しかし、その本能は無駄に終わる。離れようとする行動より素早い一撃が加えられたからだ。

防御魔法でナイフの一撃を防いだシユウは、暗殺者の頭に巻かれていた布を無造作に掴むと、その無防備な腹へ蹴りを打ち込んだ。

シユウの肉体は、ゲーム時代に何度も転生をしたトッププレイヤーの筋力を誇る。

筋力に殆どステータスを振っていなかったため、軽い蹴りを入れても一撃で死ぬ事はないが、それでも肉体強化の魔法で筋力は何倍にも上がっており、全力で蹴れば簡単に殺せる程にはなれる。

殴られ、殴り慣れているボクサーでも内臓を鍛える事は不可能と言われている。

そして、腕の三倍は力があると言われる足の力と肉体強化の魔法を掛けられた蹴りは、たとえシユウが弱くと意識した力でも暗殺者に地獄の苦しみを味あわせるのに十分だった。

腹を抑え、何度も吐いて苦しむ暗殺者を見るシユウの目には感情という二文字は無い。

「早く喋った方が楽になれますよ？でないと、更に痛い目を見ますから」

淡々と確認する声音に、やはり何の感情もない。

この声を聞いた者は、目の前にいる男は単純作業として拷問を行い、無理やりでも口を割らせるだろうと理解する事になる。

それでも暗殺者は首を横に振る。逃げる事を諦めたのか、自害をするつもりなのかは分からない。だから、シユウその意思を挫く一言を伝える。

「自害しようとしても無駄です。私は回復魔法を使えますからね。

舌を噛み切っても死ぬ前に再生させてあげますし、毒を飲んでも解毒してあげます。どんな怪我だってすぐに治しますよ。何度だって痛めつけましょう。だから、早く話して楽になりませんか？」

ビクッ一瞬だが暗殺者の体が震えた様に見えた。方法はわからない

が、やはり自害しようとして決めていたのか反応は顕著に表れる。

死のうとしても無駄という一言で暗殺者はシュウから見ても本当に怯えている事がわかった。

シュウの言葉が本当か暗殺者にはわからない。回復魔法を使える者は少ないからだ。

だが、もし事実なら死ぬ事も許されず、拷問で例え死ぬ様な傷を負わされたとしても治療され、拷問が繰り返されるといいう事が決定したのだ。どんな一流の暗殺者でも耐えられるわけがない。発狂するか泣いて命乞いをする未来しか無いと思うだろう。これで怯え無いという事は無理だった。

しかし、そんな様子を見るシュウはホッと小さく誰にも分からない様に息を吐く。

（やっぱり無理はするもんじゃないですね…。）
実は結構限界が近かった。

殺しに来た相手を殺す事に躊躇はしないが、それでも拷問をするとなると別の話だ。相手を痛めつける趣味は無いし、ドSな訳でもない。

強いて言えば、少しだけSが入ってる位だ。

だから、更に痛めつける前に暗殺者の意思を砕く必要があった。そう思ったからこそ、あえて感情を込めず必要なら躊躇はしないと言外に伝えた。

（早く言ってください…。結構疲れるんですよこれ…）

しかし、そんなシュウの気持ちとは、真逆の答えがくる。

「…ご拷問すう…するならやれ！」

ここで初めてシュウは、自分を襲ってきた暗殺者が女性だと気が付く。

（ちよっ…待つてくださいよ…。初めての拷問が女の人って…っただけ変態になればいいんですか！）

いきなりの事態に何やら変な方向に思考が飛んでいるシュウだが、そんなシュウを気にすることなく女暗殺者の言葉は続く。

「私は絶対に喋らない。拷問したければいいわ！凌辱するならすればいい！だけど、お前は絶対に殺してやる！」

布の間から見える強い光もつ紅い瞳には既に怯えの色は消えていた。その瞳を見たシユウは言霊という言葉を感じ出した。言葉には力が宿るというあれだ。この女暗殺者は自分の言葉を思い込む事で怯えを殺し、意志を固め直したのだろう。

そして、自分の前にいる男をシユウを殺す事を誓ったのだ。

シユウの黒い瞳に映る強い殺気を漲らせた紅い瞳はその意思の強さを表していた。

だから、溜め息を一つ吐き、覚悟を決めたシユウは蹲る女暗殺者が地面に着いていた右手を力を込めて踏みつぶす。

「アッアアアアアッ！」

足裏に靴越し伝わる肉を踏み潰す柔らかさと、一瞬だけ硬さを感じ、軽い音がした次の瞬間に無くなる骨の感触。そして、声帯を限界まで震わせて発せられる女性の悲鳴が倉庫に響く。

関係のない他人を巻き添えに合わせないように人気の無い場所に移動したシユウだったが、それは暗殺者の女にチャンスを与えたとも言える事だった。わざわざ御逃え向きの場所に標的が移動するのだから躊躇う必要はない。だが、結果的に拷問への助けになるとは皮肉な話だった。

足を退け右手を抱くように庇い涙を流す暗殺者を見て、シユウは再度問う。

「私もやりたくないんですよ…。だから、早く喋ってください」

しかし、首を横に振る暗殺者を見てシユウの視線が初めて感情が見え隠れする。

暗殺者の右の鎖骨を蹴り碎き、力の入らなくなった右の二の腕と肘を連続で蹴り碎いた。

「ソーソーッウン…」

それでも今度は悲鳴を上げずに残った左手を口に添えて耐える暗殺者。

眼の光が消えていないなら問答は無用だ。シユウは暗殺者の意志を再度挫くため次々と骨と関節を蹴り砕く。

しかし、何度骨を折られようが、関節を砕かれようが、何度悲鳴を上げようが、痣だらけの体を地面に倒していようが暗殺者の瞳は強い光を放ちシユウへ浴びせてくる。

既に息をするだけでも辛いはずだ。シユウは暗殺者の顔と頭に巻いてある布を取り外し呼吸を助けようとする。

（まだ話していないのに死なれたら困りますからね…）

暗殺者を痛ぶるのが目的なのか、情報を聞き出すのが目的なのかさえシユウには区別出来なくなっていた。

普段シユウと一緒にいるタマールが今のシユウを見たら、泣いて逃げる事になるだろう。シユウの瞳は異様な光を放っていた。

顔を隠していた布を取り外して出てきたのは何度も衝撃を受けたせいで解けた背中まである絹糸の様な銀髪と強い意志の瞳、汗や涙と涎、吐しゃ物などで褐色の肌は汚れているが、それでも美しい顔だった。

シユウが女暗殺者の顔を見ていると、ニヤつと口端を釣り上げた暗殺者は小さく一言。

「あたしの勝ちだ」

女暗殺者はプツと口で何かを飛ばし、シユウの首に当たった事を確認すると笑う。

「アハハ！最後の詰めが甘かったわね。それは南の砂漠に住むガラ蠍の毒が塗られた針よ！ここら辺じゃ、絶対に解毒剤なんかありません。お前は死ぬの！アッハハハハ」

シユウはそんな笑い続ける女性を見つめながら首を横に振る。

「無駄ですよ…」

シユウの顔色も呼吸も変化はない。

普通は、既に毒がまわって死んでいていはずなのだ。

暗殺者は、シユウが自分を痛めつける前に何と言っていたのかを思い出す。

「ま…まさか、本当だつていうの？」

シユウは頷きをつ。

「この場所に来てからは、一度も嘘を言っていないですよ。どんな毒も効きません」

シユウの答えを聞き、暗殺者を支えていた何かが切れた

「ア・・アアアアアアアー！」。

悲鳴とは違う、絶望の叫びだったのか、それとも慟哭だったのかシユウには分からない。ただ、悲鳴を挙げていた時とは違った嗚咽と涙を両目から流す姿を見つめ続けた。

そのまま何度も叫び続けていると痛めた身体が筋肉の動きに耐えられなかったのか、血の混じった咳を苦しそうに出す。

「ゲホツゲホツ…グツ…。。お願…殺し…・て…」

口端から血を流し、シユウへ初めて見せた懇願の眼差し。だが、シユウは首を横に振り同じ質問をする。

「誰に頼まれたのですか？」

「それは言えない…言ったら私は私じゃなくなるから…」

シユウは大きく溜息を吐き、掌を女暗殺者へ向けた。

「貴方の勝ちですね…」

それが、女暗殺者が覚えている最後の光景だった。

「んっ…んっ…」

目を閉じたまま意識が覚醒すると、今まで感じた事のない心地よい感触がした。

（何か安心出来るなあ…。この温かいのは何？）

もっとこの心地よさを感じたいと思い、体を動かしてその温かい物に寄る。

「うつうん…」

「ヘッ？」

心地良いと思っていた物から、艶めかしい声が聞こえ目を開けえ目を開けると、知らない女性の猫人族の寝顔があった。

「エ…？誰？」

大きな声では無かったが、それでも猫人族の頭に付いている毛に覆われた耳はピクピクツと私の声に反応した。

「ニャー…」

そう寝むそんな声を出し、目を擦りながら起きた女性は私を見て笑顔を見せる。

「起きたのニャ。二日間も寝ていたから心配したニャよ。良かったニャー」

豊かな胸を隠す事なく猫人の女性はベッドから降りると肌着と服を着ていく。

着替え終わると状況を把握しようとしている私を見て声をかけてきた。

「もう少し寝ているニャ。ニャーはご飯を貰ってくるのニャ。まずは落ちた体力を回復させるのが先決ニャ？」

それだけ言っ出て行こうとする猫人族の女性に私は慌てて声をかける。

「あの…アナタは誰なんですか？それと、ここは…？」

「ニャーはタマールというニャ。ここはニャー達が泊っている宿ニャー」

それだけ言って扉から出て行く。

普段なら絶対に、こんな呆けてはいられないが体中が痛い。

ボウツとして考える事が出来ない頭が煩わしい。

タマールという女性が助けてくれたのだろうかとも考えたが、頭を振って否定する。

「あの男がそんなに甘いとは思えない」

（ならば今の状況は？）

そう疑問に思った。捕虜だったらこんな待遇は望めない。ならば奴隷かと思うが、それも違うと思う。

縛りもせずに部屋に一人で放置する何てありえない。畏かとも思えだが、部屋にいたタマールに殺気や警戒の様子は無いと言える。

暗殺者は空気に敏感だ。タマールに裏は無いと断言できた。

ならば、タマールは何も知らないで世話をしてくれていたのかと思
ったが、そんな危険な事をあの男が許すとは思えなかった。

どうどう巡りの思考に捉えられながらも、まだ重い体を動かして逃
げようとベットから降りて立ち上がった瞬間、目の前のドアが開か
れる。

「え……？」

目の前には、自分を半殺しとは言えない、八割殺しにした標的の男、
シユウを確認した瞬間。

「ヒッッ！」

自分の口から出たとは思えない悲鳴を聞きながら、逃げる様に部屋
の壁際へ移動する。

「ナッななな……何であなたが、いるのよ！」

急いで離れ、自分でも何を言っているのか分からない声を出す。そ
して、動けた自分を初めて疑問に思った。

（あれ……確か全身の骨を折られていたんじゃない？）

まだ熱があり、フラフラするがそれでも強い痛みを伴う記憶は鮮明
に蘇った。

そして目の前にいる男の掌が自分の顔に被さった所で記憶が途切れ
ている。

混乱している私を見た、目の前にいる男は苦笑して頭を掻くところ
言った。

「私は暗殺者としての貴方に負けました。だから、助けたんですよ」

「は？え？だつて、私はボロボロにされて……」

意味の分からない返答に混乱する私を見て、標的の男は言葉を続け
る。

「私は貴方から情報を聞き出せませんでした。だから、私の負けで
す」

（は……？情報を言わなかったから？当たり前じゃないの？）

この発言に私はキレた、250年以上生きて一番キレたと思う。余

りにも馬鹿にした発言だと思ったのだ。

「ちよつと待つてよ！アナタに手も足も出ずに倒されたのよ！それが私の勝ちだなんて馬鹿にしているわ！暗殺者が情報を漏らさないなんて常識じゃない！」

だけど、標的の男は淡々とした調子を崩さない。

「私も最初はそう思ってたんですが、あなた以外の方はペラペラと喋ってくれましたよ」

そう言うて笑う男は私が今まで会ったどの男とも違った。

（何で？私は、あなたを殺しに来た刺客なのに、何でそんな顔で笑えるの？）

シユウが浮かべている無邪気な笑顔は何の警戒もしていない様に見える。まるで、子供が無条件に信じている親へ向けるような笑顔だ。決して拷問の結果を話す時に浮かべる顔の類ではないし、自分を殺しに来た暗殺者へ向ける顔でもない。

その顔を見て私は冷たい汗が止まらなかった。

私は10歳で刺客になってからの250年以上の長い暗殺者生活で出会ったことの無い、この男を異常だと思った。

最初は強者の余裕かとも思ったが、そんな男は今まで何人も見てきている。この男は違うと断言できた。

私はこの男が持つ異常さが恐ろしい。それと同時に、全力で殺しに来た私をいとも簡単に無力化したこの男に強く惹かれた。

だから、思った。私が感じた当然の疑問を口にする。

「何故殺してくれなかったの？」

男は笑いを納めると、当然の様に言った。

「――」

「何故殺してくれなかったの？」

シユウは数瞬の思考を行う。

確かに、自分を殺しにきた暗殺者を助けるなど普段は絶対にシユウはしない。

今までも命乞いをしてきた相手はいたが、全て殺している。可能なら殺される前に殺すというのが大前提だったからだ。

だが、この暗殺者は助けた。だが、シュウは感じてしまった。

全身の骨を砕かれても自分を貫き通すこの暗殺者の強さを。この女性を欲しいと思ってしまった。

だから、正直に話す。

「暗殺者の貴方が美しかったからです。私は貴方が欲しい。だから、助けました」

自分の正直な気持ちを伝えたと、目の前にいる女暗殺者は顔を褐色の肌でも分かるほど一気に赤く染め、両手を振りながら慌てた様子で口を開いた。

「ちょ…ままま待ってよ…。欲しいって言われても、私250歳超えているお婆ちゃんだよ？亜人だよ？確かに見た目は若いけど、歳の差つてもんが…」

（はて…200歳超えていても体力的にも問題ないよな？俺殺しに来たんだから現役じゃないの？）

「歳の差も亜人とかも関係ないですよ。私は貴方が欲しいんですから。あ…やっぱり、俺見たいな男と一緒にいるの嫌ですか？」

「べ…別に嫌じゃないわよ！」

顔を赤くして即否定する様子は違和感をシュウに与えたが、特に気にしないでおく。了承はしてもらえたのだ。それで十分だった。

「もし、俺に仕えて一緒にいる事を不満だと感じたら何時でも来てください。その時は全力でお相手します。えーっと…」

「私の名前は、リュカ・テドロよ。見ての通りダークエルフ」

この時、さっき感じた違和感の正体にシュウが気付いていれば後の歴史は変わっていたかもしれない。

シュウの発言は、暗殺者としての腕が欲しいという意味で言っていたつもりなのだが、リュカには男女としての発言に取られていた。

「全力でお相手します」という言葉を想像して顔を紅くしたリュカを見たシュウは、熱が上がったのかと思いリュカを抱き上げて優し

くベッドに運んだ。

シュウは寝かせたリュカの額に掌を当て、熱を測る。

「熱がまだありますね。体に優しい食事をタマールさんが頼んでいたので、それを食べたなら寝ましようね」

掌を外し、毛布をリュカの肩までかける。すると、リュカはシュウの手を握って少し震えた声を出す。

「少し寒いのに…」

「では、もっと毛布を借りてきますね」

シュウが立ち上がるうとする、握った手の力を強くしリュカは首を横にふる。

（はて…寒いのでは？）

シュウが首をかしげてリュカを見ると、リュカは震える「あなたで温めて…」と続けた。

シュウは、この発言で固まった。

暗殺者に襲われても平然としていられるが、まさか自分を殺しに来た暗殺者に抱いてくれと言われるとは思わなかった。

（いやいや…まてまてまてまて…ちよっと、待とうか。落ち着こうよ俺…）

シュウを見つめるリュカは、冷たく感じる美貌と熱く潤んだ紅い瞳、上気した褐色の肌が何とも言えない色香を醸し出している。

（畏か？畏なんか？でも、畏でもいいか・・・）

シュウは、この世界に魅了魔法は存在しないと言われても信じないだろう。それほど強くリュカに惹かれていた。

思考は既に麻痺し、リュカへ体が移動する。

この時のリュカは確かにシュウへ惹かれていた。恐ろしくもあった。敵わないと思うが殺す事も諦めていない。情事の後に寝首を掻く事も考えていた。

もう少しでシュウの体がリュカへ届く。

しかし、あと少しという所で扉が開かれ闖入者が乱入する。

「ニャー、お待たせだニャー？」

部屋に入って来たのはタマルだった。手にはリュカの為に持ってきた食事がある。

「……」

固まっている二人を見たタマルは、ただ一言。

「シュウさん、病人に無理をさせちゃ駄目ニヤ。ニヤー以外の女の子に手を出してもいいけど、元気になつてからにするニヤ」

怒る事も泣く事も泣く平然と言っただけだった。

そこまでシュウは思い出し、手が止まっていた事に気が付いた。

慌てて手元に残った食料自給率が書かれた資料と意識内にあるアイテムを確認して一つ頷く。

「うん、食糧は何とかなりそうだな……。後は何か産業を興せれば大丈夫なんだけど……」

シュウが呟くと壁際にいたリュカが小さい声を出す。

「あの地域は昔は鉱山が多かったわ。山が沢山あるなら、まだ探せば何かしらの鉱山があるんじゃないかしら」

シュウが今まで見た資料には、そんな記述は無かった。

「リュカさん、何でそんな事知っているの？」

すると、リュカは小さく笑ってシュウに柔らかな視線を向ける。

「伊達に長生きしてないわ」

その発言にシュウは苦笑する。

「歳の事言つと怒るくせに……」

リュカは壁から背中を剥がしてシュウの近くまで歩く。

シュウの頭を軽く小突いた後に、抱き抱え耳に熱く小さい声で囁いた。

「怒られなくなったら、今夜もいっぱい苛めてね」

そう熱っぽく呟いて、部屋を出て行くこうとするリュカへシュウは疑問に思っていた言葉を投げかける。

「最初誘って来た時に俺を殺すつもりだったでしょ？何でその後は諦めたんですか？」

リュカは笑顔を浮かべ振り向くと、首を傾げる。

「私の始めてを二つも奪ったからよ？」

シユウは首を捻って何を奪ったか考えるが、思い浮かばない。降参とばかりに、手を上げ答えを聞く。

「私の暗殺初黒星と」

最後の言葉は扉を閉める音で聞こえなかった。ただ、リュカの顔は幸せそうに笑っていた。

北アルマダ、ノワール領へ向かうまで残り約一か月。

後一か月程でノワール領は雪解けの季節になる。それまでに出来る限りの準備をしておく必要があった。

シユウは読んでいた書類を片付けながら思う。

タマールとリュカ。愛しい獣人と亜人を悲しませない為にも、自分の為にもやれる事はやろうと。

「まずは今晚を生き残らなくては……」

愛しい二人の仲が良い事に安堵を感じるが、その分負担が増えたシユウは溜め息を吐く。

だが、それは自業自得としか言えないだろう。

第4話（後書き）

ちよつとMなダークエルフのお姉さまという感じで書いてみたんですが、いかがでしたでしょうか？

タグについているロボットが最初以降殆ど出ないという事に焦りを感じ始めている作者ですが、次は戦闘シーン多めで書いてみたいと思います。

ただ、文才が無いので少し時間がかかるかもしれません・・・。

第5話（前書き）

あれ・・・見間違いかな？（；つ　）ゴシゴシ
お気に入りか85件って・・・へ？（。　。　；）

いったい何が起こったのか・・・お気に入りが一気に増えて、マジで
吃驚しています。

毎回同じ事を繰り返す様で心苦しいですが、読んでくださり、本当
にありがとうございます。

今回も稚拙&gggdな内容ですが、楽しんで頂ければ幸いです。
申し訳ありません、前回のあとがきに書いた戦闘シーンですが今書
いている最中で今回は入れられませんでしたm（――）m

第5話

その日の早朝、シウはタマールとリユカを連れ帝都ローゼリアにある工業地区にいた。

二十日後、シウ達は帝都を離れ、北アルマダ地区にあるノワール領へ出発する事が決まっている。その前に、ノワール領の地図を見て考え付いた計画を検証するためだ。

シウ達は数本の筒を持つてとある鍛冶屋の作業場へと入っていた。

「こんにちは。ロイドさんいますか？」

作業場には十代半ばの人間の少年が道具を磨いて作業前の準備をしていた。

シウに気がつくとき少し待っていて欲しいと言って奥へ走って行く。十分程経つと、赤ら顔をした顔中に髭を生やす身長百二十センチ程のドワーフが出て来た。

「おー、坊主じゃねえか。どうしたんだ？」

シウの腰程しか無い身長で、手に酒瓶をもっているこの男が、この鍛冶屋の店主ロイドだった。

「朝から飲んでいるんですか？」

「こりゃ水だよ水…。少し酔う効果がある不思議な水だよ…」

（それは普通にお酒なのでは…）

シウの目の前でラッパ飲みしているロイドはシウの持つ筒を見ると、瓶を口から筒へ向ける。

「そりゃ何だ？随分沢山あるみたいだが…」

シウは実に良い笑顔をロイドに向けてから口を開く。よくぞ聞いてくれましたと言っても言いたげだ。

「先日話した事を覚えていますか？」

ロイドは記憶を探る様に視線を上に向け、ハッと目を見開いた。

「ま…まさか、馬より早く移動できるってあれか!？」

シユウは「正解」と一言呟いて、筒の中に丸められていた一枚の羊皮紙を机に広げる。

書いてあるのは、設計図だった。寸法をこの世界の数字で表しているが、読める者はその大きさに驚くことだろう。

「スターリングエンジンという外燃機関の一種です」

ここでは詳しい説明を省くが、簡単に言うと構造が簡単で温度差があれば動かせる便利なエンジンだと考えてもらえばいい。問題は内燃機関（ガソリンエンジン等）に比べて大きさの割に出力が低い事だ。

シユウが考えた事、その一つは恒久的に動力を得る事だった。

機構さえ工夫すれば様々な事に応用する事が可能だ。もちろん、一定以上の精度は必要だが、ピストンやシリンダー、パッキン等の重要な箇所はシユウが持つ魔導機兵のパーツを使えばクリアーできるし、この世界でも代用品はあるだろう。

シユウが調べた結果、この世界にある金属の種類は地球に存在しない物も多い。落ち着いたら地球に存在しない金属の特性を調べたいと思うが、今は時間も無いし、知識もない。

エンジンに使う材料の選定も出来ないのだ。ならば、専門家に聞けば良いと思い、帝都で腕の良い鍛冶屋を探していたらロイドと出会った。

シユウの話を最初は信じず馬鹿にしていたロイドも詳しい話を聞いていくと真剣になり、図面を持ってきたら相談に乗るといった話になった。

（何が役立つかわからない物ですねえ…）

この世界は魔力社会であり科学文明は地球の中世と大して変わらない位ではない。

そしてシユウの持つ知識は科学文化溢れる現代だ。紙さえ高級品の時代に安価に大量に作ればどうなるか想像して貰えれば判り易いだろう。

それが高級品で需要がある紙を作るのでは無く、いつかは必要にな

るだろうが、未だ需要が不明はエンジンを造るなのだから先端を走っているのか、ただの暴走なのか謎な処だが。

「ふむ…スターリングエンジンねえ…。随分と単純な構造だな。この高温部ってのは何だ？」

手に持った酒瓶を口に当てガブガブと飲むロイドにシュウはニヤリと口角を上げて答える。

「そこは熱する場所ですね…。およそ最高で千二百度、最低でも八百度と考えています」

ロイドはシュウが笑いながら答えた数値に酒を噴き出した。

「ブウツ…ゲホツウエホ…お前は火山にでも落とすつもりか！」

「よくわかりましたね」

冗談で言っただけだが、まさかの正解と聞きロイドはシュウの正気を疑い始める。

しかし、淡々と答えるシュウの顔は真剣であり、嘘を言っている様には見えない。

シュウはピストンとシリンダー、内部に封入した気体を通る本体部を指し示す。

「この場所は摩耗と温度変化があります。温度差も最低八百度以上と考えてください」

ロイドは、呻き声を上げ自分の知識を探る。鍛冶師になって七十年を超えるが、ここまで無茶な注文は初めてだった。

確かに予算を度外視すれば、造る事は可能だ。

ロイドはシュウがノワールの領主になり、二十日後ノワールに行くと聞いていた。だが、殆ど収入の無い領地をもった領主に払える額ではない。

広大で肥沃な領地を持つ貴族にも払える額でも無かった。例え実行しても材料の一割も集める事はできないだろう。

ロイドは首を横に振り、大きく溜め息をついて語る。

「材料に当てはあるが、帝国中の商会と鍛冶屋から手に入れないと足りん。職人の賃金やら輸送費も含めれば最低でも十億Gは必要だ

ぞ…」

「十億Gニヤ！」

「十億G！」

シュウの後ろで興味本位に聞いていた、タマールとリュカは余りの大金に卒倒しそうになっているが、シュウは何も言わなかった。

ロイドの顔色から無理だと思っていたが可能だと聞いて喜色を浮かべただけだ。

シュウは即答する。時間が経てばすぐに回収可能な金額だと思っただし、シュウの意識化にある数字の表示は十億Gに足りないが、その金額の九割以上をクリアしている。

他に考えている事も実行できれば実現に時間はかかるが、今の時点で書いて来た図面の寸法でスターリングエンジンを造る事はない。

「では、二年後に十億G払いましょう！」

「ニヤーーー！！」

「ちょ…シュウ君！つて…えつ…ちょっタマールさん、起きて、起きてっ。タマールさん気を失っちゃ駄目よ！」

シュウの言葉を聞き、タマールが気絶し、シュウを止めようとしたリュカは卒倒したタマールを倒れないように支えた為に言葉を続ける事が出来ない。

ロイドは弟子の少年を呼んで気絶したタマールを運ばせ、リュカはタマールに付き添う為、この場を離れた。

設計図を乗せた机を挟み、シュウとロイドは向かい合った形で残される。

ロイドは少し苛立ちを混ぜた声でシュウに問いかけた。

「なあ…坊主、俺をからかっているのか？話をちゃんと聞いていたのか？確かに十億あれば即決で集まるだろうよ。だが、普通に考えて払える額じゃないだろ」

ロイドは信じられなかった。目の前にいる見た目二十代の人間種の男に払える訳が無いと。

確かに普通はロイドの思うように払える訳がないと思う。だが、目

の前にいる男は普通ではない。

だから、シウはロイドの質問に答え、ロイドに尋ねる。

「今の段階で二年後に十億Gもの大金は払えませんが、明日になれば判りません。ただ、払える可能性はありますよ。それに時間をかけるのも無駄じゃないですよ。小さいのを作って調べる事で性能を上げる研究は出来ますから。それで、どこに何の金属を使えばいいですか？」

シウは図面の各部品を指差しロイドの答えを待つ。

「ハッ…ダーツハハハッ」

ロイドは笑い声を上げ設計図を乗せている机をバシバシと叩いた。朝から大量のお酒を飲んでいるロイドだが、急に笑い上戸になった訳でもない。

ロイドが笑った理由、それはシウが本気でやろうとしている事を理解し、馬鹿馬鹿しいまで愚直に進む姿を面白いと思ったからだ。

ロイドは今年で九十歳を超える。

鍛冶師になってから只管働き、四十年前に帝都に店を開いた。亜人というだけで差別を受けもしたが、それでも帝都で名の知られた鍛冶師だ。

シウの様なぽつと出の貴族より、もつと上の貴族に仕事を頼まれた事もある。鍛冶師として子供や孫に自慢できる依頼もこなしてきた。だが、ここまで馬鹿で面白い話は無かった。

しかも、シウまだ他にも同様の計画があると言う。

これで興味の沸かないドワーフはいない。

「いいだろう。俺が責任を持って教えてやる。十億G準備出来た時の為に、明日にでも坊主へ商会も紹介してやる。ただし…」

「ただし？」

（何だろ？権利よこせ！とかだったら困るなあ…。使いようによっては軍事バランス崩すし…）

シウはロイドが途中で黙り戦々恐々とした。

そして、ロイドは腕を組み、鼻息を荒くして重い口を開く。

「俺もこれを造りにお前の領地へ一緒に行く！研究もさせる」

「はい？」

ロイドの発言に驚いた声を出したのはシュウでは無くタマールを運んで戻ってきたロイドの弟子だった。

「親方、店はどうするんですか！依頼の品だってあるのに、やばいっすよ！」

しかし、ロイドは頑として譲らず弟子を睨む。

「うるせえ！お前も鍛冶師の見習ならこんな面白い話は滅多にねえと思うだろ！急ぎの依頼以外全部断っちまえ！この店は閉めて坊主の領地で店ひらくぞ。まだまだ坊主が面白い物を造りそうだからな！」

例え断ったとしても付いて来そうな剣幕だ。弟子の少年が「そんなあ…やつと恋人できたのに…」と男泣きしているがロイドは五月蠅いとハンマーを投げて黙らせた。

シュウにはロイドの申し出はありがたい。だが、来るなら言うておかなければいけない事がある。これからシュウがやる事は危険を伴うのだから。

「えーつと…ロイドさん、私からも二つ条件が…」

ロイドは視線を弟子からシュウに向け直し髭をなでる。

「ふむ、言ってみろ」

シュウは軽く咳払いをしてから、姿勢を正してロイドの目を見て話す。

「では…まず一つ目、これから造っていく物は使い方によって容易に人を殺せる事ができます。他の人に知られるのは時間の問題ですが、それは遅い方がいい。まずは、私の領地で試して問題無く使えれば広めてくれて構いませんから、それまでは内密にお願いします。ただ、大きい物もあるのでロイドさん以外の職人も必要ですし、大工や他の職人も必要です。信用出来る人を帝都で顔の広いロイドさんに誘って欲しいのです」

ロイドは簡単に頷いて先を促した。

（そんな簡単に頷いていいの？まあ、頼むだけなら大丈夫なのか？ただ、これで集まらなかったらどうしょ…）

「二つ目、私の領地は人も少ないですし、貧しい土地です。もちろん改善はしていきますが、失敗するかもしれません。ロイドさんが帝都に戻る可能性もあり得ます。その事を理解しておいてください」

ロイドは髭を撫でながら一つ頷きシュウの腕を軽く叩く。

「お前は何を馬鹿言っているんだ？失敗したってやりなおせばいいじゃねえか。こんな計画を立てるお前が失敗するなら誰だって失敗しちまうよ。俺は坊主が出した条件を飲むぞ」

ロイドが快諾し、シュウの計画が一步進んだ翌日、ホンジオ商会という名の帝国国内と周辺国に多数の支店を持つ商会を紹介してもらったシュウは、新たな問題に直面する事になるのだが、それはまだこの場にいる誰も知らない。

第5話（後書き）

今回の話に出てきたスターリングエンジンは作者が学生時代専攻していた分野です。学生時代を思い出して書きましたが、結構忘れていて苦労しました・・・。
次こそ戦闘シーンを・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3090ba/>

GUNZ OF PATRIOT

2012年1月10日21時34分発行